古墳時代の「石製品」と「石製模造品」

本展で紹介する中心的な遺物は、古墳時代中期を代表する「石製模造品」という石製の祭祀遺物である。一方、古墳時代前期を代表する腕輪形石製品などは「石製品」と呼称される。

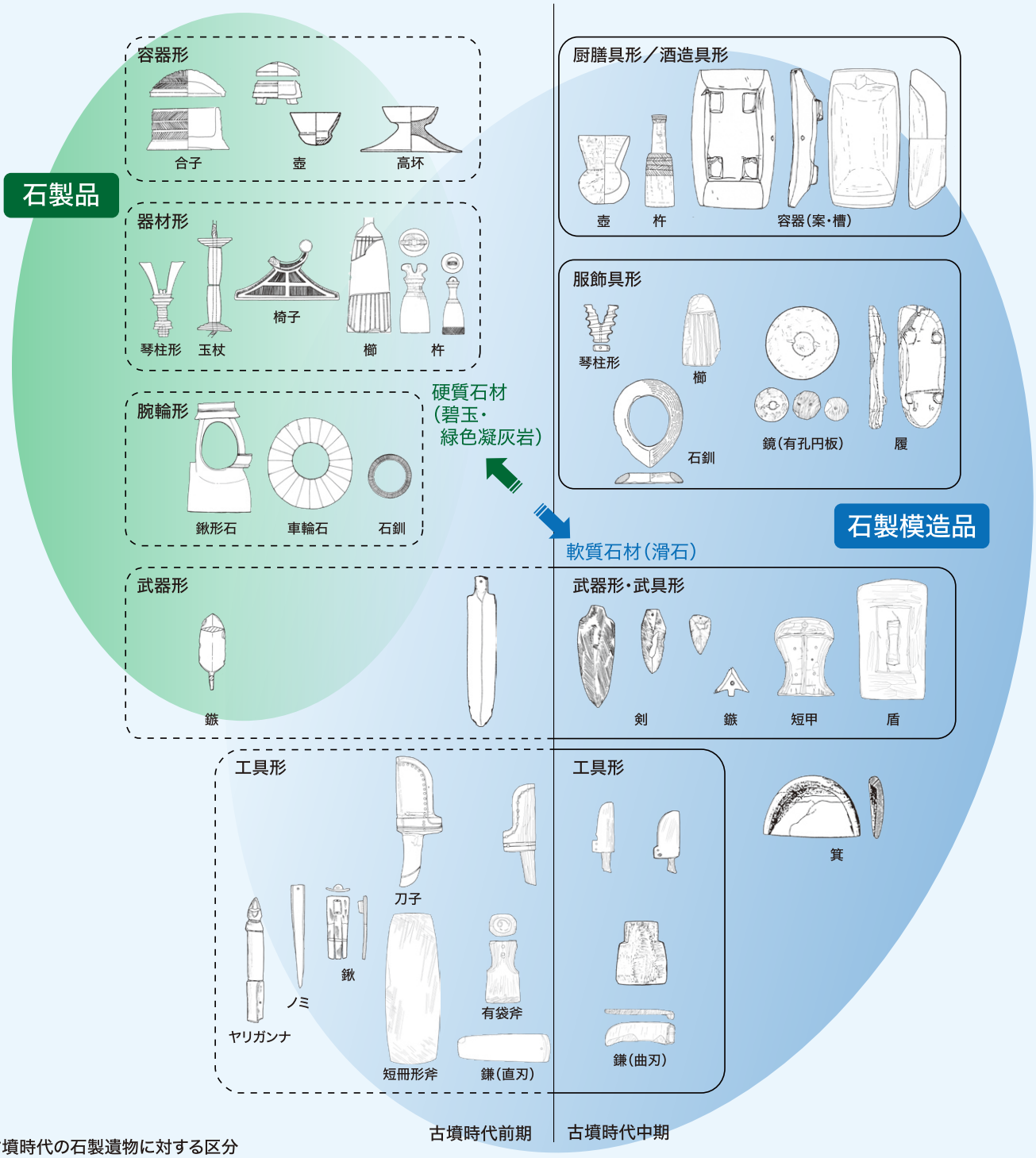
こうした二者の関係を、材質／精粗／性格／時期の属性を基準として端的に示すと

「石　製　品」・・硬質石材（碧玉・緑色凝灰岩）／精製／宝器／前期（４世紀中心）

「石製模造品」・・軟質石材（いわゆる滑石）　　／粗製／仮器／中期（５世紀中心）

という構図で示される。一見すると、材質・精粗・性格・時期が整然と分けられているように見えるが、そうした概念に当てはまらない資料も存在する。

本展では、先ず東北地方の石製品に触れる。そして、福島県内の古墳から出土する石製模造品を紹介する。



古墳時代の石製遺物に対する区分

I. 古墳時代前期の石製品

東北地方で出土する石製模造品は少ない。そうした中、腕輪形石製品および琴柱形石製品の出土が知られる。

a）腕輪形石製品

腕輪形石製品が東北地方の古墳から出土した事例は大安場１号墳が唯一である。一方、集落からは、十三塚遺跡・板橋２遺跡から出土している。集落出土事例はいずれも破片であるが、地域において拠点的な集落と考えられている。

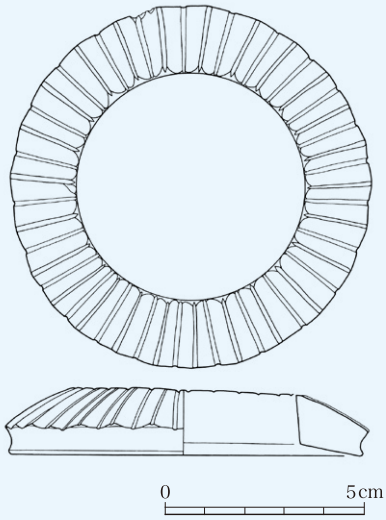
大安場１号墳

大安場１号墳は、福島県郡山市田村町に位置する。1995年に地形測量が行われ、北から南に延びる丘陵上に後方部を南側に向けた、前方部二段・後方部三段の前方後方墳であることが判明した。その規模は、全長83mを測る。

埋葬施設は後方部の墳頂平坦面で確認された。後方部上は削平を受けていたが、長さ10m・幅２mの範囲で粘土槨の痕跡と考えられる粘土が確認された。その内側の褐色土は、木棺の陥没に伴う流入土と考えられた。埋葬施設からは、棺の北寄りの位置で水銀朱の散布が確認された。棺の中央部で腕輪形石製品が出土し、棺の中央やや南には大刀・剣・槍といった武器類が、さらに南からは直刃鎌・短冊形の鉄斧などの農工具類が出土した。

大安場１号墳全景（東より）

腕輪形石製品は、粘土と暗褐色土の境を確認する作業を行っていたところ、木棺底面付近と考えられる位置から出土した。この石製品が出土した際、円形のため石釧（いしくしろ）の名称で呼ばれたが、環帯幅が広いという車輪石の特徴も備えており、「腕輪形石製品」と呼ばれることとなる。



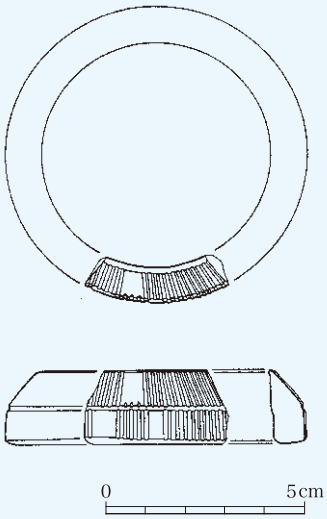
大安場１号墳出土腕輪形石製品

大安場１号墳埋葬施設腕輪形石製品出土状態

十三塚遺跡

十三塚遺跡は、宮城県名取市に位置する。1986年度の第６次調査では、古墳時代の竪穴建物24棟・掘立柱建物跡２棟などが検出された。その際、古墳時代前期のＳＫ-１※土坑から石釧が出土した。淡緑色の緑色凝灰岩で、推定直径7.4㎝・高さ1.8㎝・底面幅0.9㎝で、斜面と側面に刻みが施される。側面の２ヵ所と斜面の１ヵ所に刻みを施さない部分が見られる。

遺跡が立地する同じ丘陵上には、東北地方最大の前方後円墳である雷神山古墳（全長168m）、前方後方墳５基が築かれる飯野坂古墳群が存在する。石釧が出現した背景にそうした古墳築造動向が関係していることは言うまでもないだろう。



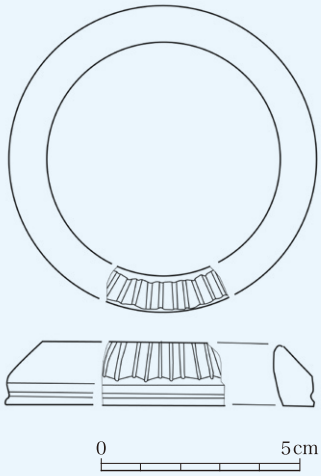
十三塚遺跡ＳＫ-１出土遺物

※ SK：土坑の記号

板橋２遺跡

板橋２遺跡は、山形県天童市に位置する。遺跡からは古墳時代前期から中期の遺構・遺物が多数確認された。竪穴建物跡32棟・掘立柱建物跡３棟・河川跡１条に加え、土坑・溝跡が数多く確認されている。集落の南には、幅６ｍを超える河川が東から西に蛇行しながら流れ、河川からは多量の土器や木製品が出土した。

ＳＫ872土坑は、南北軸が長い２ｍ×2.9mの歪んだ楕円形で、検出面からの深さは0.3mである。出土遺物は壺、甕類がある。石釧は破片ではあるが、推定で直径11cmを計る。淡緑色の緑色凝灰岩である。環帯面には山と谷に線刻が施され、側面には横方向の溝が刻まれている。



板橋２遺跡ＳＫ872土坑出土遺物

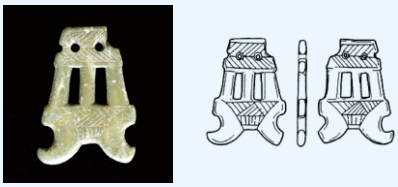
b）琴柱形石製品

琴柱形石製品は、福島県の遺跡では出土例はないが、山形県・宮城県で出土例がある。

下槇遺跡

下槇遺跡は、山形県西村山郡河北町に位置する。遺跡が所在するのは寒河江川の扇状地で、東方向に緩やかな傾斜する沖積面上にある。現在は水田、一部が畑地となっているが、この寒河江川扇状地の北半にも古墳時代の遺跡が数多く分布する。

４号住居跡・５号住居跡出土の石製品は、琴柱形石製品と呼ばれるもので、そのうち「本村型」と分類されるものに該当する。両資料ともに形態は酷似する。穿孔部を上とする場合、上部には、上辺に沿うように綾杉文を刻み、その中心線の上に二孔一対の穿孔を穿つ。その両端にはわずかに抉りが入れられている。中央部は台形を呈し、その中央に縦長の透かしを二か所あける。この透かし下部には、逆位・正位・逆位に三角形を横に連ねた構成で、その内側に４～５本の沈線が刻まれる。その下部には縦の線刻が施され、その両側には勾玉状の突起が表現されている。



下槇遺跡４号住居跡出土遺物

下槇遺跡５号住居跡出土遺物

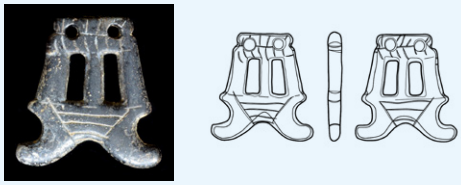
0　5cm

入の沢遺跡

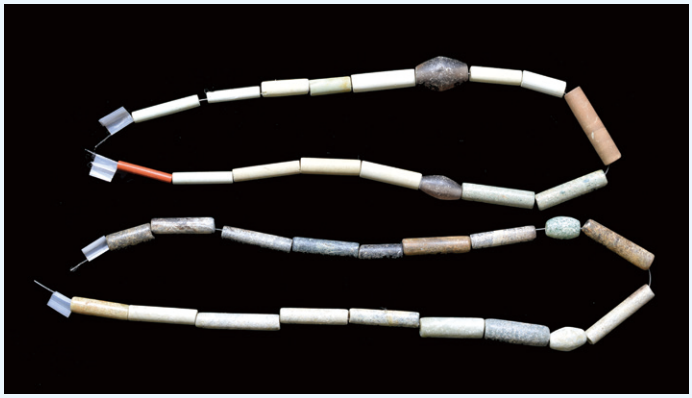
入の沢遺跡は、宮城県北部の内陸部栗原市築館に位置する。奥羽山脈から東に延びる、北上川支流の一迫川と二迫川に挟まれた丘陵のうち、最も南側の丘陵先端部にある。遺跡は2014年に調査され、古墳時代前期の大規模集落と判明した。

古墳時代前期後半の大溝跡、材木塀跡、盛土遺構、竪穴建物跡、整地層が検出された。大溝跡と材木塀跡、盛土遺構は並行する区画施設で、全周すると考えられる。竪穴建物跡は可能性があるものを含めると40 棟以上検出され、この内12 棟の調査を実施した。5 棟確認された焼失竪穴建物跡は保存状態が良好なものが多く、屋根構造や床面施設の機能、遺物の配置等多くの知見が得られた。

13号竪穴建物跡からは、多量の土師器とともに銅鏡２面（珠文鏡・櫛歯文鏡それぞれ１面）・鉄製品（剣・斧・方形板刃先）・玉類（勾玉・管玉）・垂飾品・土製品・石製品（砥石・棗玉・丸玉・臼玉）が出土した。出土遺物の時期は、古墳時代前期後半と考えられる。



0　5cm



入の沢遺跡13号竪穴建物跡出土遺物

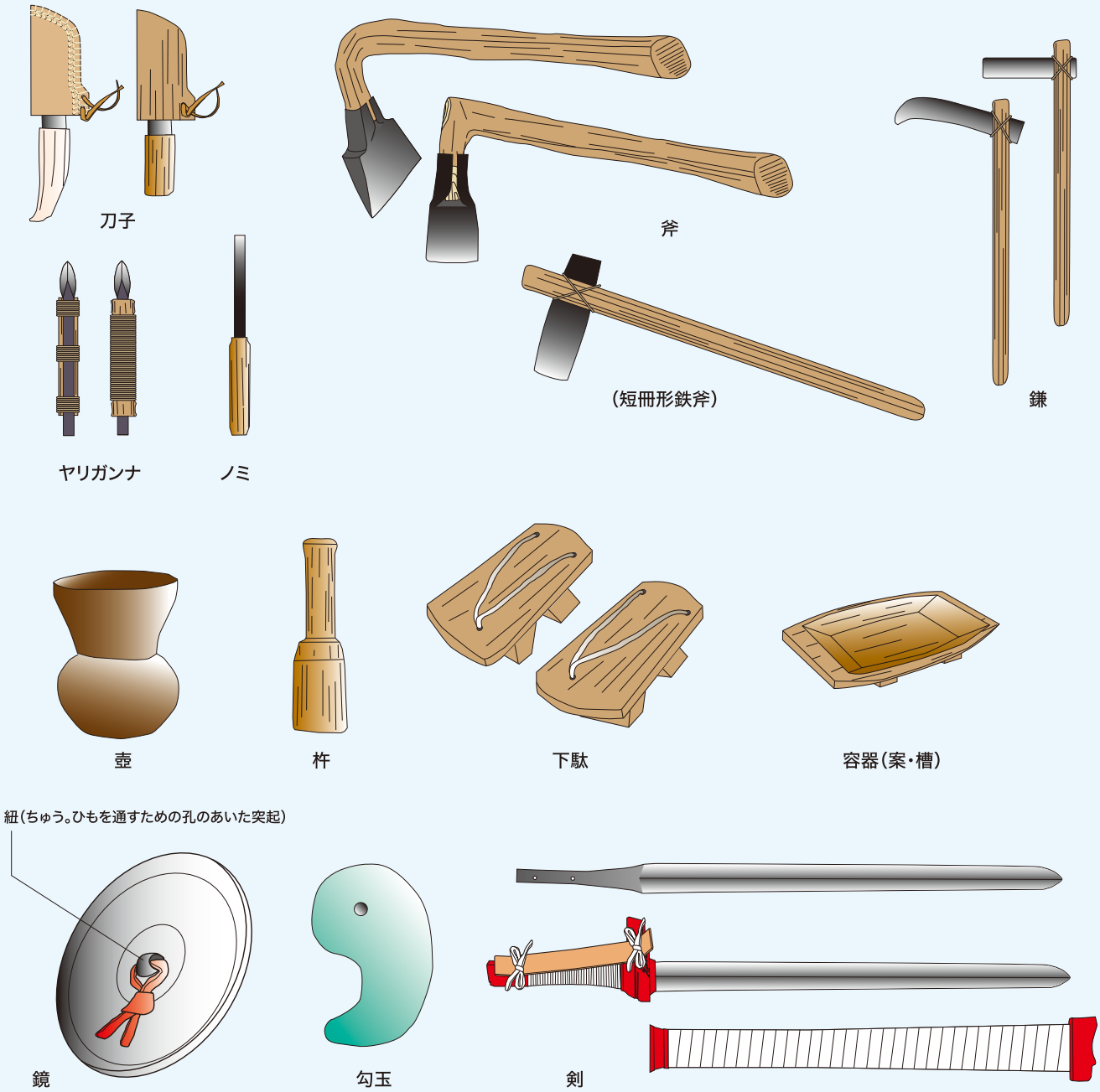
Ⅱ.古墳時代中期の石製祭祀遺物　石製模造品

(1)石製模造品とは

古墳と祭祀遺跡は、いずれも古墳時代を考える上で重要な要素である。石製模造品は、その両者を共通して分析できる数少ない遺物の一つであり、古墳時代中期を代表する祭祀遺物である。そして、近畿地方中央部を発祥の地とし関東地方で盛行することから、ヤマト王権の東国に対する勢力伸長を反映するものと理解されてきた。この考えは、今日にいたるまで基本的な視点として受け継がれている。

a)模倣されるモノ

石製模造品には、農具や工具（刀子・斧・鎌）、武器や武具（剣・短甲・盾）、服飾具（鏡・有孔円板・櫛）、厨膳具や酒造具（壺・杵・盤・槽）など、多数の器種が認められる。そして、古墳では刀子形・斧形などが、祭祀遺跡・集落では剣形・鏡を模倣したと考えられる有孔円板が中心となる。このように異なる性格の遺跡から異なる器種の石製模造品が出土するため、自ずと研究も古墳と祭祀遺跡それぞれを対象としたものとして進められてきた。



石製模造品の模倣対象

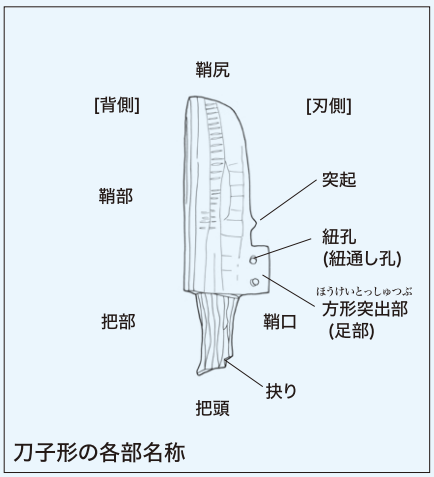
b）刀子形石製模造品の模倣対象となる刀子

石製模造品の刀子形は、刀子を忠実に模倣していると考えらえる。刀子は鉄製の刃、刃に装着される把（つか）、そして鞘（さや）からなる。

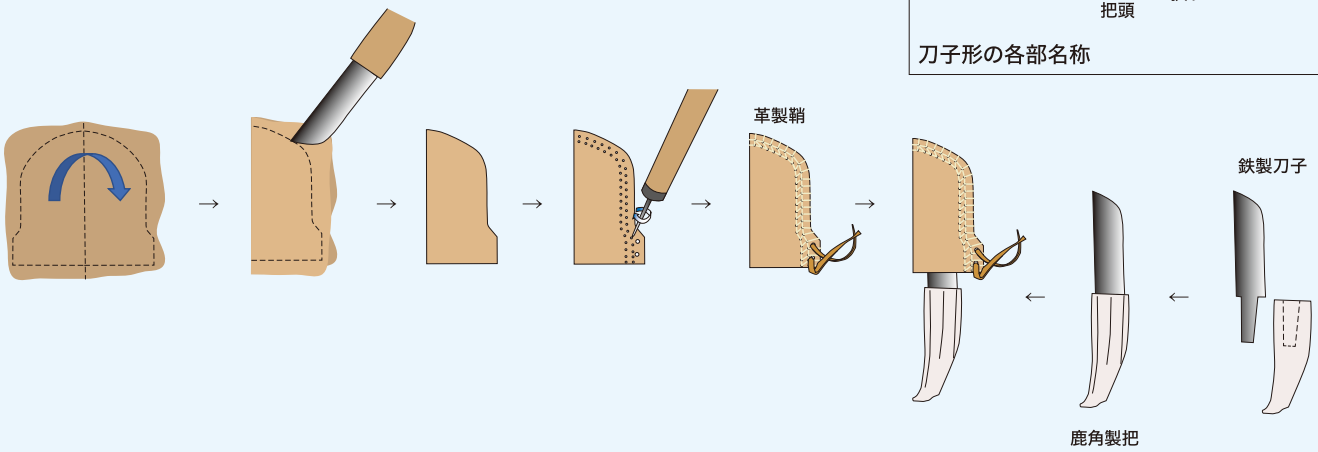
石製模造品にみられる刀子形は、刀子本体が鞘に収められたものが大多数を占めるものの、刃と把のみの抜き身の状態を模倣したものも一部にみられる。

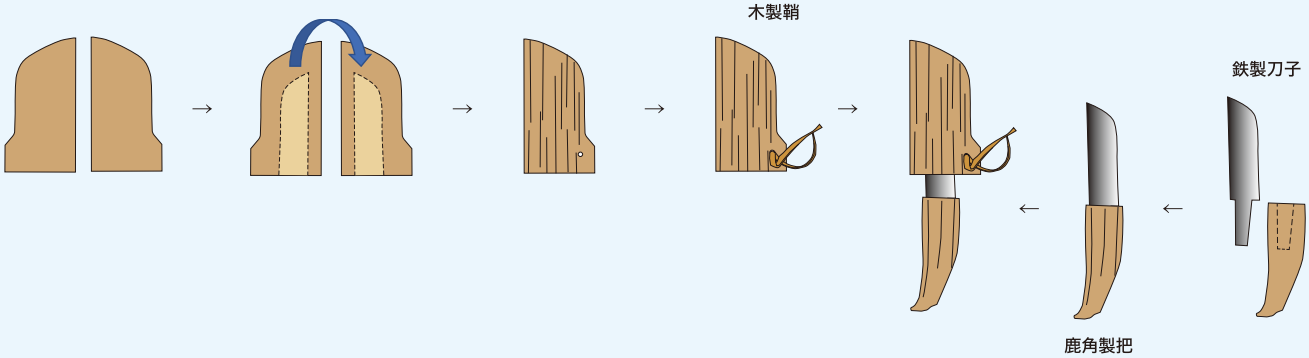
刀子は刃は鉄製だが、その他の部分は革、木、鹿角（ろっかく）などが素材になったと考えられ、遺存状態は良くない。そのため、精巧な作りの石製模造品が本来の刀子を復元する大きな材料となる。また、埴輪の中にも刀子を表現したものがみられる。

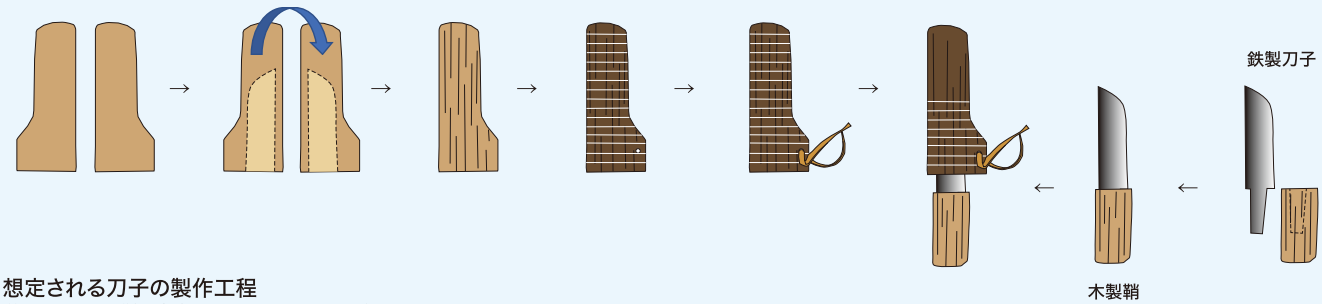
出現期の石製模造品から復元される刀子本来の姿は、革製の鞘と鉄製刀子からなる。鞘は、革を重ね合わせた端の部分に貫通孔を穿ち革紐で綴（と）じ合わせ、突出部分につり下げるための革紐を取り付ける。刀子本体は鹿角、あるいは木製の把に鉄製の刃を差し込む。なお、鞘部は革製のほか木製のものも想定される。



刀子形の各部名称







想定される刀子の製作工程
革製・木製の鞘、鹿角製・木製の把が想定される。

(2)東北地方における石製模造品出現期の様相

阿武隈川上流域にあたる福島・栃木・茨城の県境付近では、奥羽山系を源流とし東流する阿武隈川が北に大きく向きを変える。その支流である社川（やしろ）は八溝（やみぞ）山系から東に流れ、北に向きを変え阿武隈川と合流する。同じく八溝山系を源流とする久慈川は、北東方向から南方向へと大きく流れを変えている。この地域では、東北地方における石製模造品の出現期を考える上で重要となる二つの遺跡が知られる。

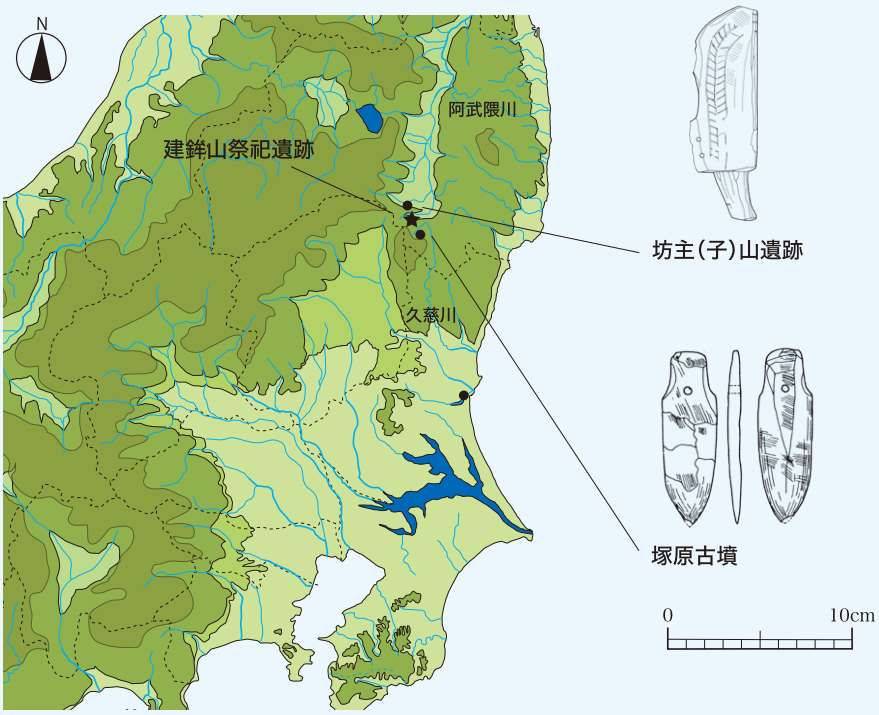
塚原（つかはら）古墳

塚原古墳は棚倉町に位置する。久慈川流域に位置する小規模な円墳群の一基と考えられ、石製模造品が出土している。出土した石製模造品は剣形２点である。把部を作り出し大型のもの、そして基部が平坦に加工され両面に鎬（しのぎ）を有するものである。前者の形態は東北地方では他に例を見ない特徴的なもので、当地域において最も初期に位置付けられる。

坊主（ぼうず）（子（こ））山（やま）遺跡

坊主（子）山遺跡は白河市に位置する。刀子形は、大型で丸みを帯びる把手をもち、鞘部には縫い合わせを表現する線刻がなされる。採集資料のため遺跡の様相は不明だが、古墳の存在が想起される。

阿武隈川および久慈川両河川の上流域には、石製模造品を数多く出土した建鉾山（たてほこやま）祭祀遺跡が位置する。塚原古墳・坊主（子）山遺跡の両遺跡は、建鉾山祭祀遺跡の出現以前に遡（さかのぼ）ると考えられる。そのため、建鉾山で祭祀が行われる以前、石製模造品を使用する葬送儀礼が導入されていた可能性が高い。



東北地方における出現期の様相

塚原古墳出土遺物

(3)阿武隈川流域における石製模造品出現期

a)塚野目11号墳

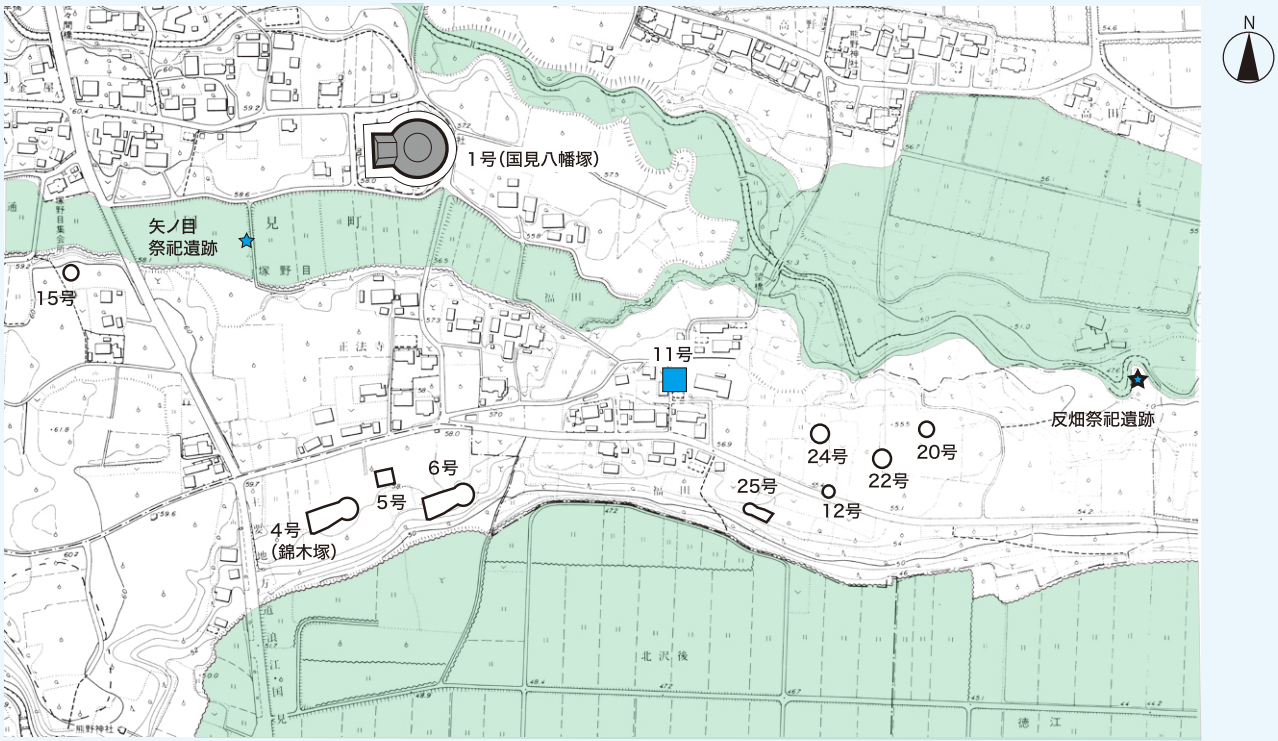
塚野目11号墳は、福島県北部の伊達郡国見町から桑折町にかけて分布する塚野目古墳群にある。阿武隈川に注ぐ塚野目川の南岸、河岸段丘に位置している。塚野目古墳群は、かつては塚野目四十八塚と呼ばれていたが、現存する古墳は数基を数えるのみである。古墳群の北には、全長66～68mの帆立貝形前方後円墳・１号墳（国見八幡塚古墳）がある。また、南には後期の前方後円墳・４号墳（錦木塚古墳）が築造される。

11号墳は、一辺約18mの方墳で、刀子・斧・鎌形が出土している。石製模造品の特徴から５世紀前半に比定され、古墳群内では最も初期に築造された古墳と考えられる。

塚野目11号墳とほぼ同時期と考えられる矢ノ目祭祀遺跡が西側に位置する。さらに、反畑祭祀遺跡が東側の丘陵端部で確認されている。いずれも多量の石製模造品とともに土師器が出土している。塚野目古墳群では、真野古墳群と同じように群形成の端緒となる古墳に石製模造品が副葬されていることが判る。さらに、主要古墳と同じ時期の祭祀遺跡が顕著に見られ、古墳築造において石製模造品が重要な役割を果たしていたことが想定される。

塚野目１号墳（南より）
八幡塚古墳。全長66～68mの前方後円墳。

塚野目４号墳（南西より）
錦木塚古墳。全長43.5mの前方後円墳。

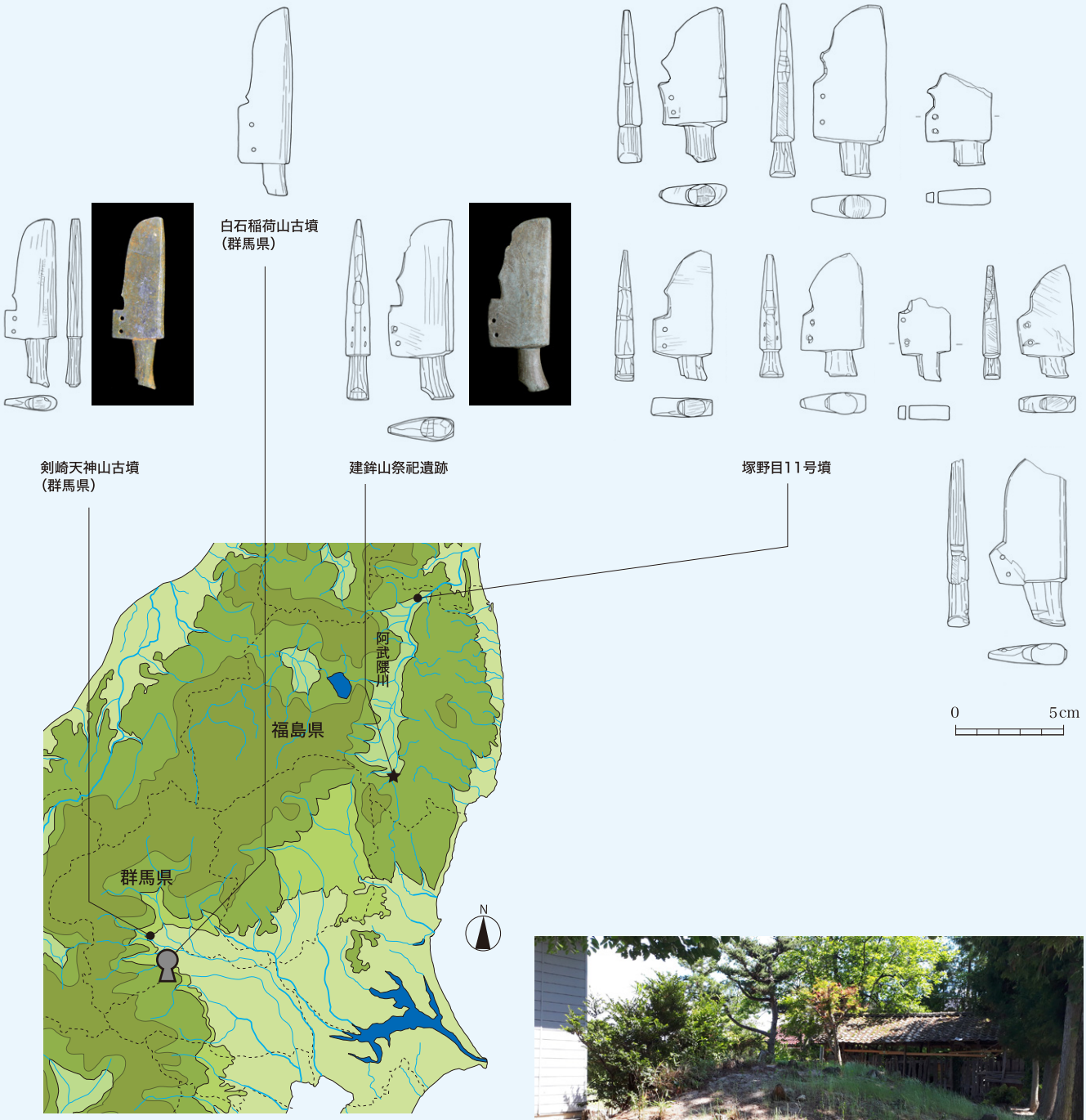


塚野目古墳群古墳分布図

b）共通する形態

塚野目11号墳から出土した刀子形のうち、鞘部の方形突出部に２孔が穿たれ、刃部に突起を持つ特徴を持つものを「突出部二孔突起類型」と呼ぶ。小型のものほど突起が形骸化し痕跡程度にしか残っていないが、把部先端に抉りがあることでは共通している。

建鉾山祭祀遺跡からも特徴を等しくする刀子形が出土している。福島県外に類例を求めると、群馬県高崎市剣崎天神山古墳・藤岡市白石稲荷山古墳・前橋市舞台１号墳例が挙げられる。そのため群馬県に系譜を求めることが出来る。



塚野目11号墳と関連する突出部二孔突起類型の刀子形

塚野目11号墳
一辺18m以上の方墳。現況1.5mの高さがある。

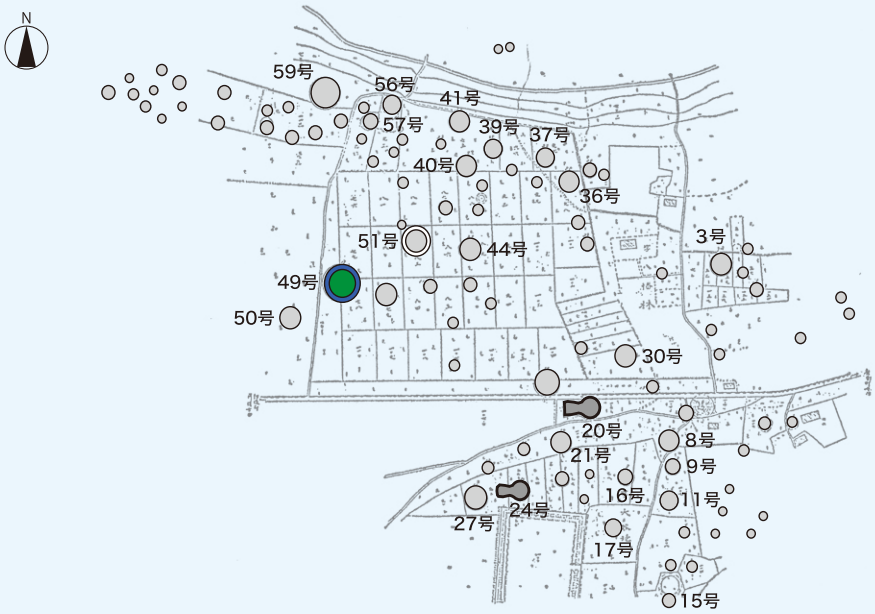
(4)太平洋沿岸部における出現期の様相

a)真野49号墳

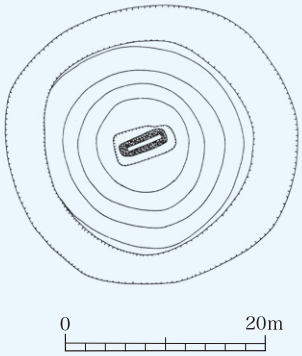
真野49号墳は、福島県南相馬市鹿島区に位置する真野古墳群にある。古墳群は真野川南岸の台地上に営まれ、寺内地区にある約80基の支群と、その西方約１kmの小池地区の約20基の支群からなる。慶應義塾大学が1947・1949・1957・1961年の４回にわたり、計27基の古墳を発掘調査している。大多数は後期の円墳と考えられるが、そのうち前方後円墳が２基確認されている。20号墳は全長28.5m、24号墳は24.7mの前方後円墳で、いずれも６世紀前半の築造と考えられる。

49号墳は、径21mを測る円墳で、古墳群の円墳の中では最も大きい。埋葬施設は礫で木棺を囲う礫槨（れきかく）と呼ばれるもので、刀子形・斧形・鎌形に容器形・鏡形などの石製模造品が出土した。築造時期は５世紀前半と考えられる。

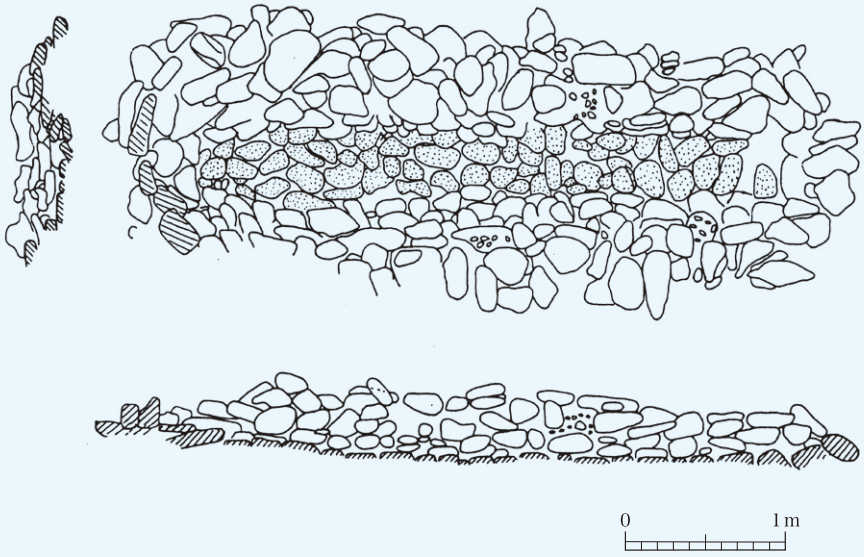
石製模造品により築造時期が分かる49号墳を除き、５世紀の古墳は不明であるが、石製模造品出土古墳は複数存在するようである。いずれにせよ、49号墳が最大規模の円墳であることに変わりはなく、真野古墳群形成の端緒となったのは相対的に有力な古墳で、石製模造品が副葬されていることを指摘できる。



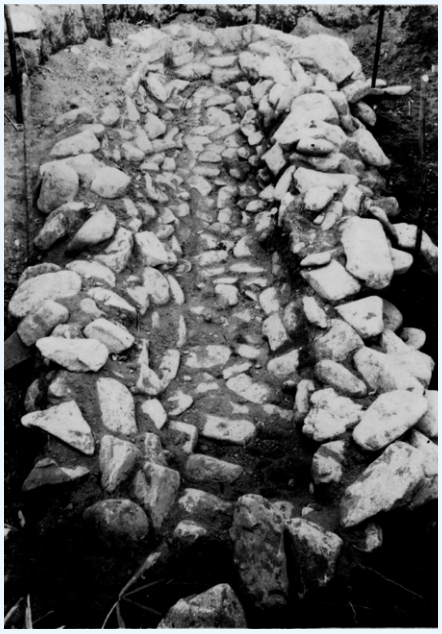
真野古墳群古墳分布図



真野49号墳



真野49号墳礫槨



真野49号墳礫槨全景

真野49号墳の礫槨からは、刀子形・斧形・鎌形に容器形・鏡形などの石製模造品が出土した。出土した刀子形は把部が明確に作り出されているが、方形突出部は無い。把部が長く、把部先端には抉りがみられる。丁寧に整形され平滑でやや光沢がある。斧形は肩部が明確に屈曲し全体に幅広である。表面はわずかに削り痕が認められるが、全体に丁寧で平滑に仕上げられ工具痕は不明瞭である。袋部基部先端には擦痕が顕著である。袋部は中央部が最も広がっている。内側側面そして底面ともに比較的丁寧に加工されており、工具痕はあまり残らない。鏡形は、中央に紐が削り出されており、表面は平滑に整形されている。

真野49号墳出土石製模造品

真野49号墳出土容器形石製模造品

真野49号墳出土石製模造品出土状態

b）共通する石材

真野49号墳から出土した石製模造品で特徴的なのは、その石材である。青灰色に乳白色の部分が貫入している。これまで、付近での調査件数は少なく、石材の様相は不明であった。そのため、石製模造品が在地の石材で製作されたのか、他地域の石材を用いて製作されたのか不明であった。昨今、南相馬市でも遺跡の発掘調査数が増加し、石製模造品に用いられる石材の様相も明らかとなってきた。

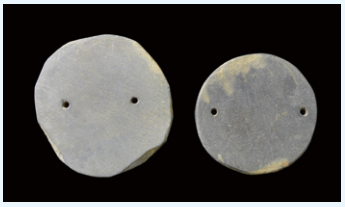
そうした石材を考える上で、山形県尾花沢市八幡山（はちまんやま）祭祀遺跡の事例が参考になる。同遺跡の石製模造品石材は次のように分類される。

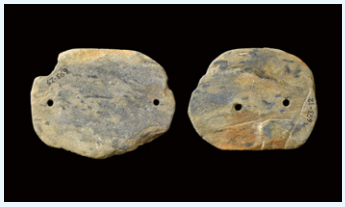
・石材ａ：黒色あるいは青色を帯びる灰色を呈すもので、剥離（はくり）している場合も多い。比較的均質な色調だが部分的に白色を呈するものもある。

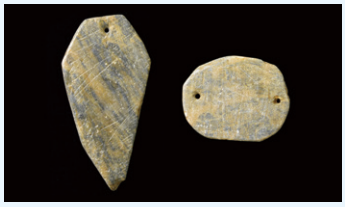
・石材ｂ：基本的に灰色を呈するが、表面が粗く黒色の点が斑状に見られる石材ｂ１と、橙色・乳白色などが筋状に混入する石材ｂ２に分けられる。

そして、石材ａは山形県内の村山地域から宮城県北部の大崎平野にかけて主体となり、石材ｂは宮城県仙台平野から阿武隈川下流域および福島県北部の沿岸部で見られる、という二つの特徴が上げられる。

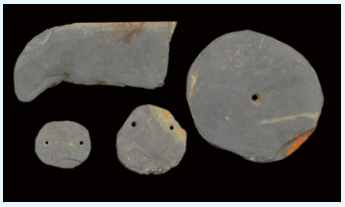
真野49号墳の石材の特徴は、石材ｂ２に分類される石材であることから、在地の石材を用いて製作された可能性が高い。

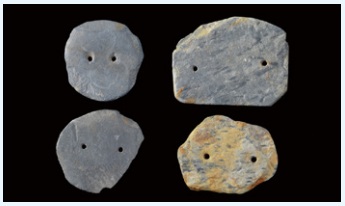

八幡山遺跡（石材ａ）

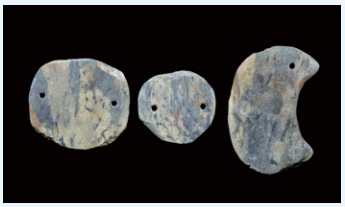

八幡山遺跡（石材ｂ１）


八幡山遺跡（石材ｂ２）

東北地方における特徴的な石製模造品の石材


念南寺１号墳（石材ａ）


藤田新田遺跡
（左：石材ａ、右：石材ｂ２）


鴻ノ巣遺跡９次19号住（石材ｂ１）

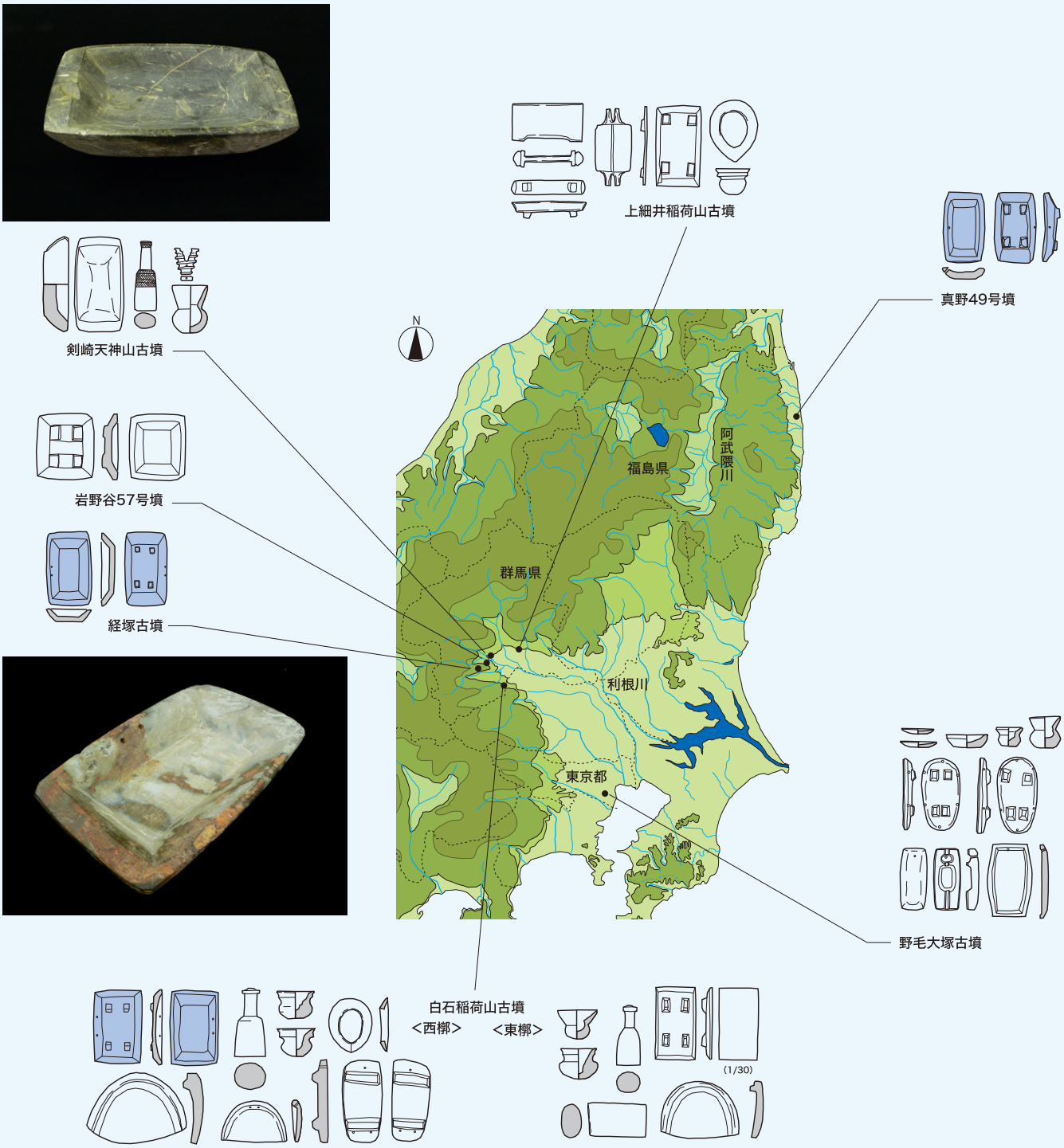
桶師屋遺跡（石材ｂ２）

c）想定される工人の移動

真野49号墳から出土した石製模造品の中で特徴的なものに容器形がある。容器形の木製品を模したもので、底部には短い四つの脚が削り出されている。案（あん）あるいは槽などと呼ばれる。

形態の特徴は、長方形の容器形で、脚部を持つ点である。同様の特徴を持つものは、群馬県藤岡市白石稲荷山古墳、安中市経塚古墳で出土している。この他、脚が無いものでは、高崎市剣崎天神山古墳出土遺物に類例がある。また、脚があるが正方形に近い形態のものが安中市岩野谷57号墳で出土している。なお、四脚を持つ盤と呼ばれるものは、白石稲荷山古墳東槨・上細井稲荷山古墳（かみほそいいなりやま）で出土例がある。

真野49号墳出土例は、微細な相違は認められるものの、経塚古墳・白石稲荷山古墳と共通する形態と言える。前述したように、真野49号墳の石材は在地の石材であると思われることから、製品の移動ではなく、製作者の移動を考慮すべきであろう。



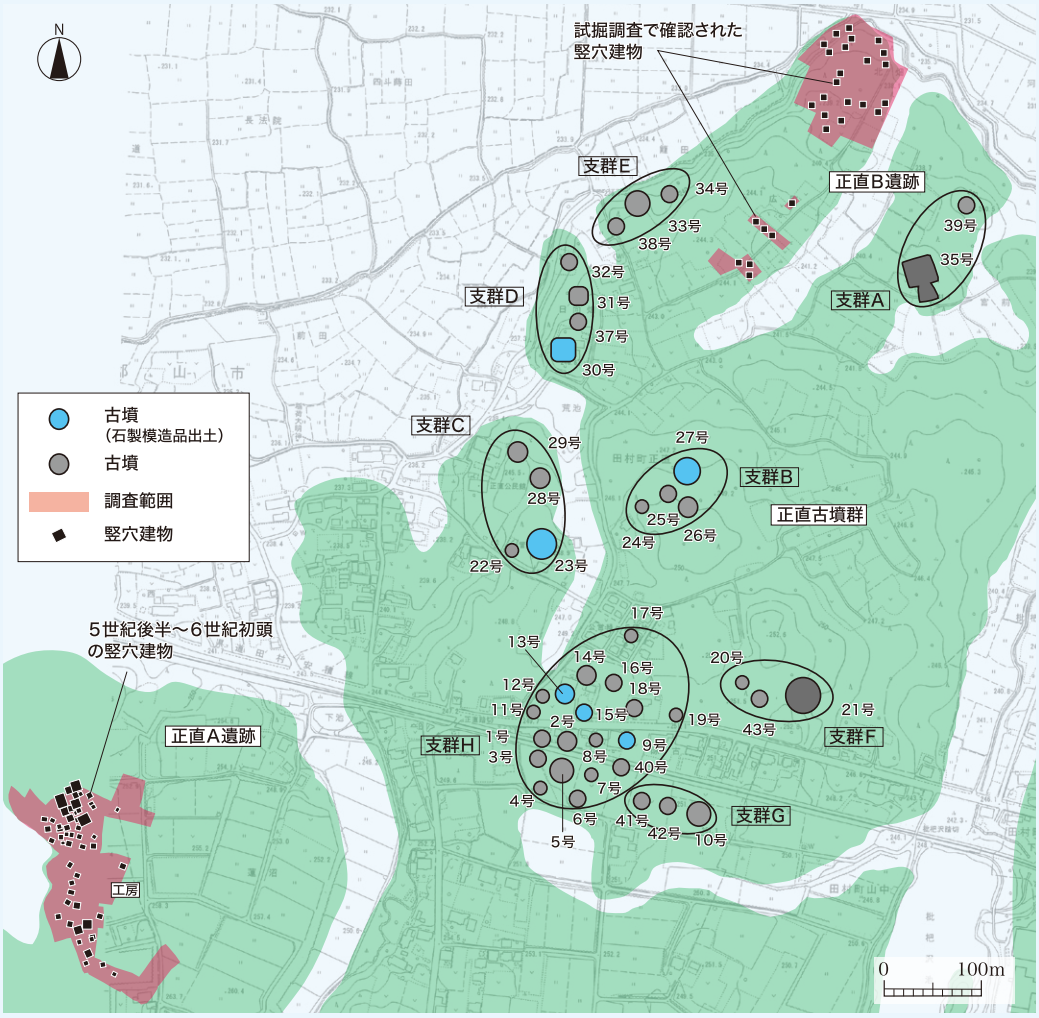
容器形および関連石製模造品出土古墳

(5)継続する石製模造品

a)正直古墳群

正直古墳群は郡山市田村町にある。南から延びる丘陵の先端近くに位置し、北側には阿武隈川により形成された沖積地が広がっている。古墳群は当初30余基から構成されるものと考えられてきたが、古墳数はその後の調査により増加し、現在では43基を数えるまでとなった。確認された古墳の他にも、耕作時に破壊された古墳があったものと考えられ、往時は50基前後の古墳により形成されていたと思われる。

正直古墳群古墳遠景(南上空より)

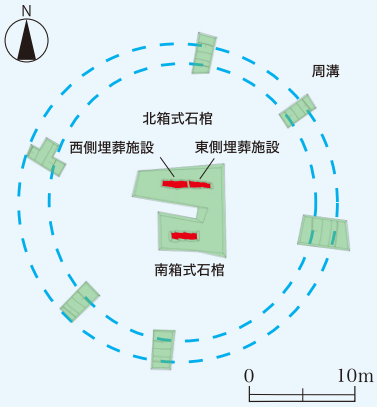


正直古墳群古墳分布図

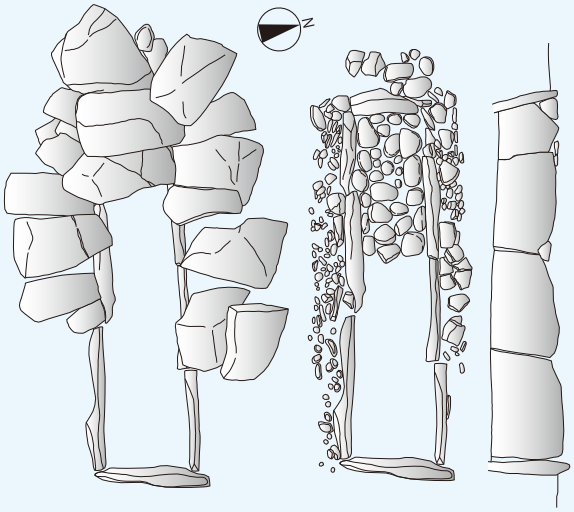
b）正直27号墳

正直27号墳は、24号～26号墳とともに、古墳群のほぼ中央に位置する支群Ｂを構成する。27号墳は支群の中でも最も規模が大きく、緩い丘陵の端部に位置する。1970年12月、ブルドーザーによる掘削（くっさく）を受けた際に石棺（せっかん）が発見され、緊急の調査が行われた。

調査では埋葬施設と周溝が確認され、墳丘の中央部で箱式石棺が検出された。石棺は南北に並列しており、北箱式石棺と南箱式石棺とに分けられる。このうち北箱式石棺は中央に仕切り板が配され、東側埋葬施設と西側埋葬施設とに分けられている。周溝は６か所のトレンチで確認され、幅2.0m、深さ1.0mを測る。内側での規模は径26mを数える。



正直27号墳調査箇所と遺構配置



正直27号墳南箱式石棺

南箱式石棺

南箱式石棺は、内側中央部で259×49㎝、床面からの高さは55㎝を測る。また、短辺は若干東側の幅が広いことがわかる。床面は礫敷で、遺物を取り上げた後に礫を掘り下げると、扁平な河原石が敷き詰められていた。

重機の掘削により石棺が発見された際、棺底に敷き詰められた礫とともに多量の石製模造品が取り出された。そのため、石製模造品の出土状況は不明である。取り出された土砂を選別していると、小礫に混じって、石製模造品が多数含まれていることが判明する。

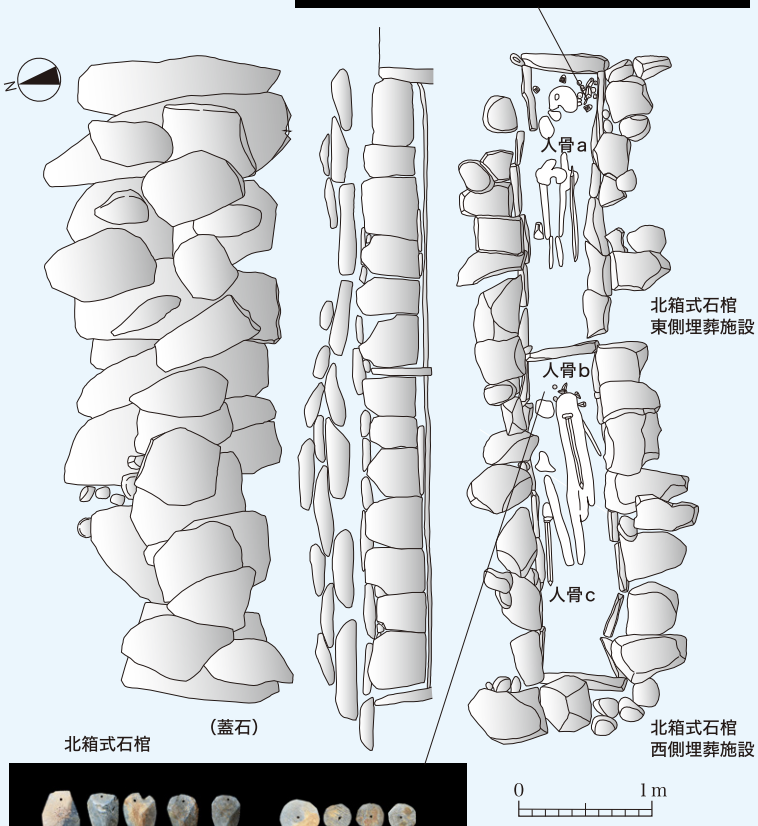
石製模造品は、斧形１点・刀子形６点・剣形19点・有孔円板24点である。剣形は形態・石材の特徴から２つの類型に、有孔円板のうち単孔の円板は、石材の特徴から３類型にそれぞれ分類することが可能である。

北箱式石棺

北箱式石棺は蓋石（ふたいし）で覆われていた。石棺内部は中央で仕切られ、東側埋葬施設と西側埋葬施設に分けられる。石棺内部は全面に赤彩（せきさい）がなされ、目張り粘土まで丁寧に一連の赤彩がなされていた。両石棺ともに土砂の流入はなく、遺物の遺存状態は良好であった。

北箱式石棺の東側埋葬施設は、内側中央部で208×45㎝を測る。北壁は６枚の板石からなり、床面には礫が敷き詰められ、人骨１体（人骨ａ）が確認された。人骨ａの頭蓋骨周辺から多数の石製模造品が出土している。石製模造品の内訳は剣形23点、有孔円板14点で、これらに混じり滑石（かっせき）製臼玉（うすだま）783点、ガラス小玉７点が確認される。

西側埋葬施設は、内側中央部で225×51㎝を測る。北壁は７枚の板石からなり、床面には礫が敷き詰められている。南側で１体（人骨ｂ）、北側で１体（人骨ｃ）の人骨が出土した。いずれも頭を東側に向けている。人骨ｂは保存状態が良く、ほぼ全身の骨が出土している。これに対し人骨ｃは保存状態がやや悪い。石製模造品の内訳は剣形18点、有孔円板９点で、これらに混じり滑石製臼玉673点、ガラス小玉３点が出土している。



正直27号墳北箱式石棺

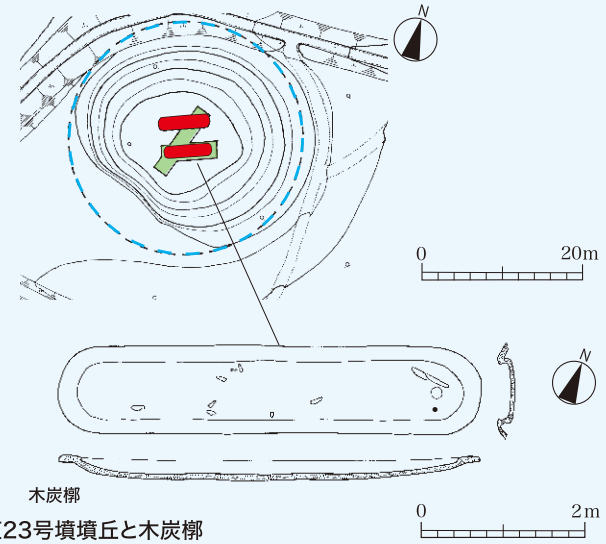
人骨ａ頭蓋骨および石製模造品出土状態

正直27号墳北箱式石棺（西より）

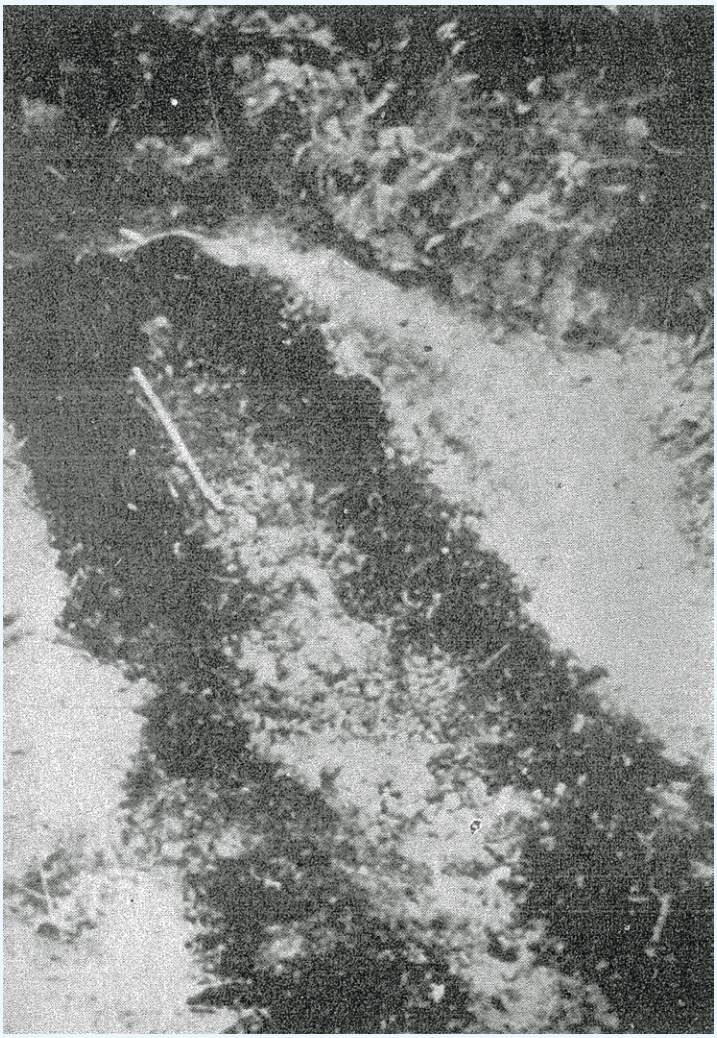
c）正直23号墳

正直23号墳は、開析谷（かいせき）により画された狭い丘陵上にあり、同じ丘陵上に隣接する22号墳や28・29号古墳と支群Cを構成する。調査は、1949年に福島県学生考古学会が実施した。墳丘の規模は、直径29m・高さ５mである。

埋葬施設は木炭槨（もくたんかく）と、詳細は不明だが並行して粘土槨が確認されたようだ。木炭槨からは竪櫛、刀子形石製模造品６点が出土した。この刀子形は比較的大型で、包丁のような形態を呈し、一見すると一般的なものに比べ扁平で時期が新しいと思われる。しかし、革袋の鞘の縫い合わせの表現があるなど、写実的な表現を残していた。また、その内の１点には方形突出部を表現する線刻も見られた。



正直23号墳墳丘と木炭槨


正直23号墳埋葬施設
（『福島県発見の埋蔵文化財図録』より）

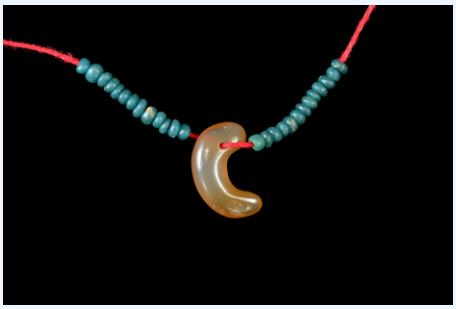
d）正直30号墳

正直30号墳は古墳群の北西にある支群Ｄに位置する古墳で、1981年に調査された。方墳の可能性があるとされたが、他の事例から円墳の可能性も捨てきれない。一辺22.5mで、木棺（もっかん）直葬の埋葬施設２基が、２棺並列の状態で確認された。

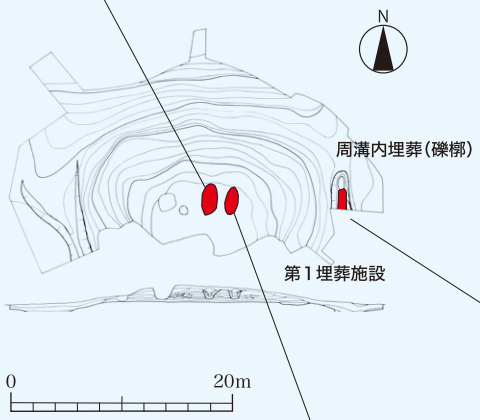
第１埋葬施設からは刀子形４点・剣形１点・有孔円板４点などの石製模造品、臼玉・管玉・琥珀（こはく）玉が発見された。この刀子形は、通常方形突出部にある穿孔が把部にあり、通常とは異なる形態であった。第２埋葬施設からは、鉄刀子、臼玉・ガラス玉・管玉・瑪瑙（めのう）勾玉などが出土した。

周溝内の埋葬施設

正直30号墳の周溝からは排水溝のある埋葬施設が確認された。墳丘上の埋葬施設とも軸線をそろえており、有機的な関連性をもった配置となる。中央に木棺を据え、こぶし大の礫で木棺を固定する。短軸断面形は緩やかに湾曲し、長軸断面形は端部が緩やかに立ち上がり、舟底（ふなぞこ）状を呈する。広い意味で礫槨と呼べるだろう。内部から剣形３点、有孔円板６点の石製模造品が出土している。



第２埋葬施設出土遺物



第１埋葬施設出土石製品模造品

周溝内埋葬出土石製模造品

e）刀子形の特徴

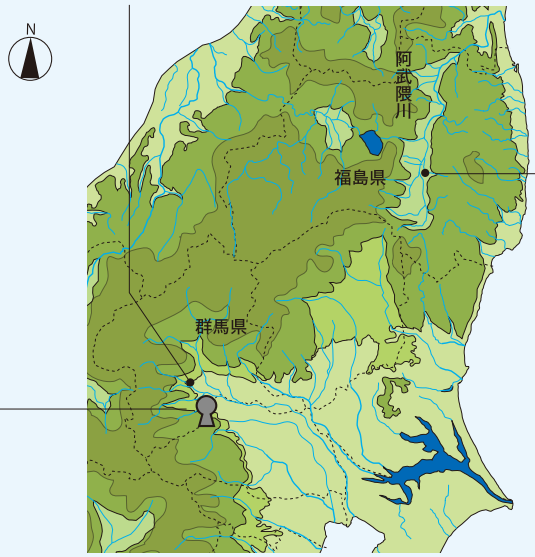
正直古墳群出土の刀子形は、27号墳が定型的で最も古く位置付けられる。27号墳出土の刀子形に類似する形態のものを探すと、群馬県や千葉県、あるいは大阪府などでも確認される。その中でも最も形態的特徴を等しくするものに、群馬県高崎市剣崎天神山古墳・同藤岡市白石稲荷山古墳例が挙げられる。そのため27号墳出土の刀子形は、群馬県の古墳出土遺物に系譜を辿ることができる。

一方、23号墳や30号墳の刀子形は他に類を見ない形態であることがわかる。正直古墳群における初期の石製模造品は、他地域との関連が強く見られるものの、時期の進行とともに形骸化が顕著であり、在地において独自の変化を遂げたものと考えられる。

白石稲荷山古墳
（群馬県）

剣崎天神山古墳
（群馬県）

正直27号墳



0　5cm

突出部二孔類型の刀子形

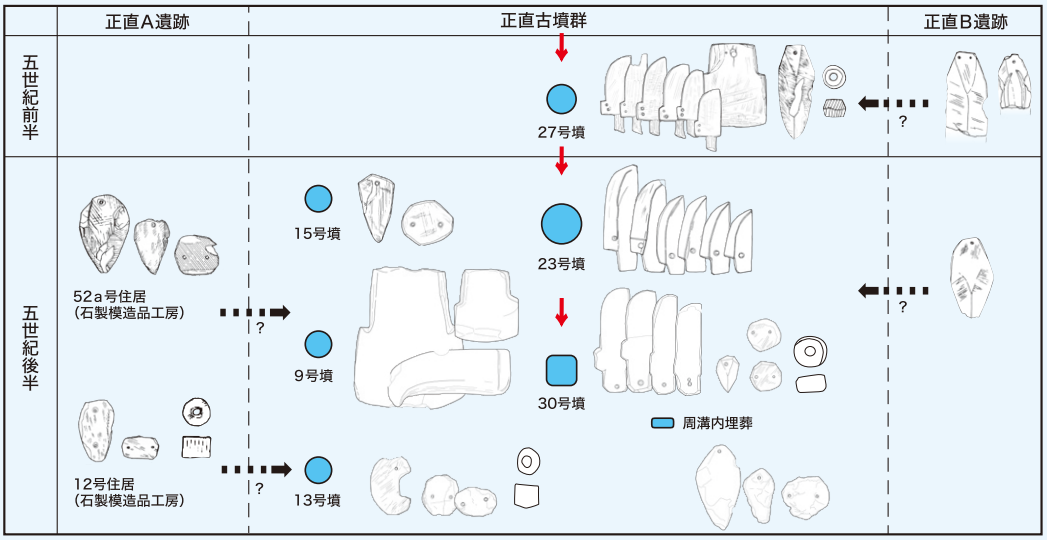
正直23号墳と30号墳の刀子形はいずれも大型扁平化し、刀子形各部の省略化が顕著で、形態の変容が著しい。一方、23号墳と30号墳では形態変化の方向性が異なる。23号墳は方形突出部の表現が１点を除き消失し、背側における鞘部と把部の区別も完全になくなるが、穿孔は鞘部にある。これに対し30号墳は、方形突出部・背側における鞘部と把部の区別が残存するものの、穿孔の位置が本来の方形突出部から把部へと大きく移動している。そのため、「23号墳→30号墳」あるいは「30号墳→23号墳」という直接的な形態変化の方向性は考えられない。刀子形出土古墳の位置付けは、27号墳が最も古く、23号墳と30号墳が相対的に新しいと把握している。

f）正直古墳群の構成と推移

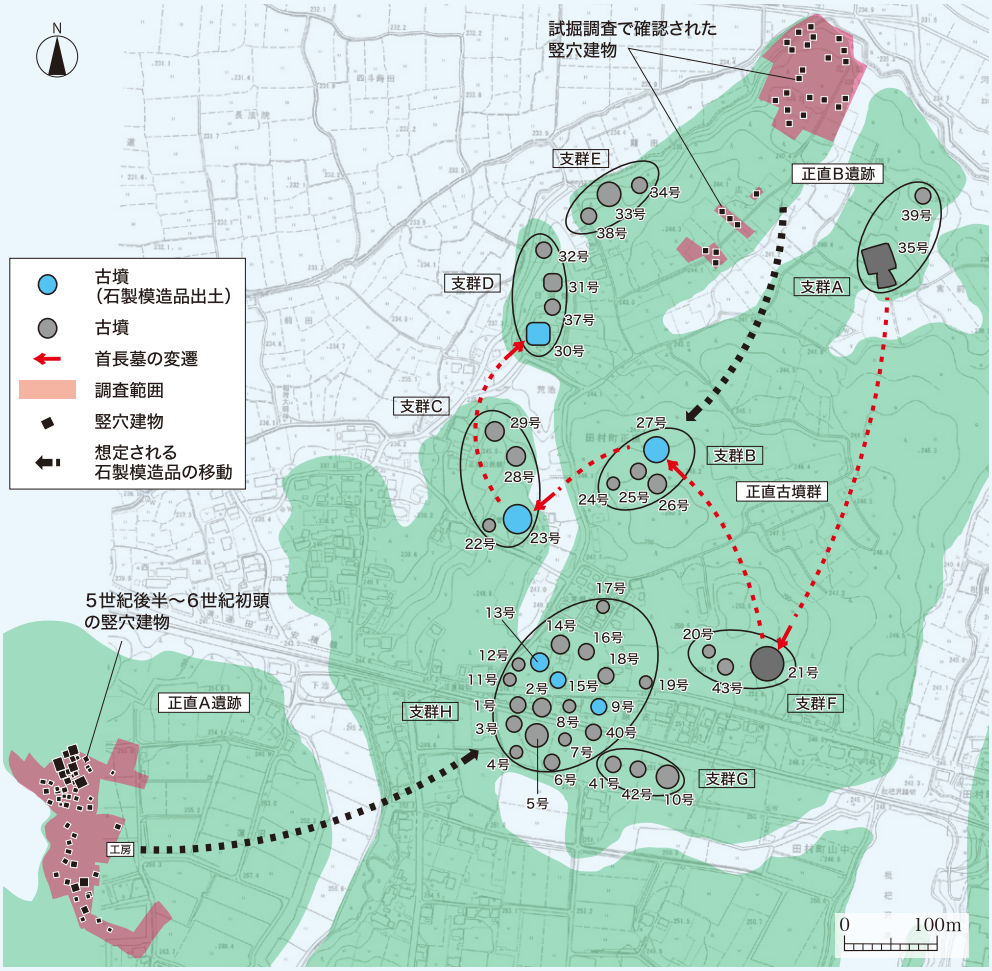
支群Ａ～Ｇのなかで出土遺物から築造時期がわかる古墳は、それぞれの支群で最大規模を誇る支群Ａの35号墳、支群Ｆの21号墳、支群Ｂの27号墳、支群Ｃの23号墳、支群Dの30号墳である。また、Ａ～Ｇのそれぞれの支群内における首長墳と他の古墳の規模に差がみられる。

古墳群の築造契機となったのは前方後方墳・35号墳で、それに続く21号墳は円墳だが規模が大きく築造時期は４世紀末から５世紀初頭と考えられる。副葬された石製模造品から27号墳は５世紀前半、つづいて23号墳と30号墳が５世紀後半に築造されたと考えられる。

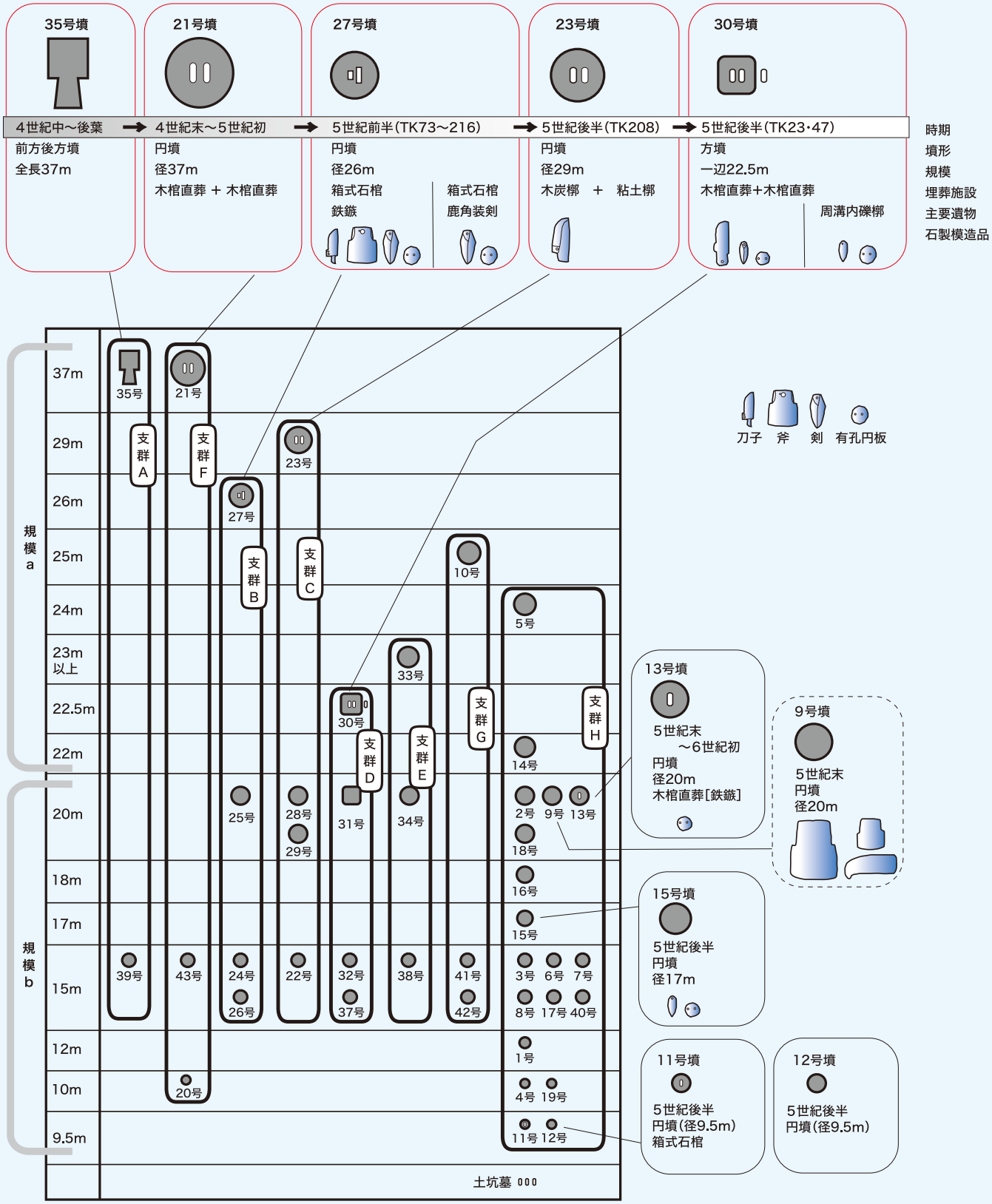
時期の異なる首長墳に農工具形石製模造品がともなうことから、正直古墳群の首長墳では石製模造品を用いた葬送儀礼が継続していたことがわかる。27号墳の築造に端を発する石製模造品の導入期には定型的であった刀子形石製模造品が、時間の経過とともに地域独自の形態に変化していく点も明らかとなった。



正直古墳群における石製模造品の移動と首長墓の変遷



正直古墳群変遷図



正直古墳群古墳群構成図

石製模造品を使用した葬送儀礼が継続的に行われた。刀子形が使用されたのは、27号・23号・30号墳といった支群中最大の古墳に限定されており、それらの古墳は小首長墓あるいはそれに準じる古墳と考えられる。

(6)５世紀後半の石製模造品

a)天王壇古墳

天王壇古墳は本宮市に位置する。安達太良山の東側では、扇状地から平坦面が発達し、北流する阿武隈川との間に盆地状の地形を形成する。盆地内の微高地上に、福島県内の中期古墳を代表する古墳群が存在する。北西から谷地古墳（円墳・25m）・産土古墳（円墳・約30m）・天王壇古墳（造出付円墳・38m）・金山古墳（円墳・30m以上）・庚申壇古墳（前方後円墳・33m）の各古墳で、その全てから埴輪が出土している。

円筒埴輪の特徴はⅣ期後半～Ⅴ期前半を示し、古墳編年では７・８期に位置付けられる。近年の調査などにより、庚申壇古墳→金山古墳・天王壇古墳→産土古墳という築造順が明らかとなってきている。古墳群形成の端緒となった庚申壇古墳からは石製模造品の出土は見られないが、最大の天王壇古墳からは刀子・斧・櫛形などの石製模造品が出土している。

集落では、住吉Ｂ遺跡と上高野遺跡が知られているが、破橋遺跡や玉貫遺跡でも５世紀代の土器が出土している。いずれも一部の調査あるいは採集遺物のため全容を窺うことは不可能だが、微高地を中心に集落を形成していたと考えられる。上述した遺跡のうち、面的調査がなされた住吉Ｂ遺跡で石製模造品工房が確認されている。この工房で観察される数種類の石材は、全て東側の阿武隈山地で採取することができる。天王壇古墳から出土した刀子形・斧形・櫛形などの石製模造品に使用した石材もまた、阿武隈山地で現在も採取可能である。

大玉村・本宮市の主要遺跡分布

天王壇古墳遠景(北より)

天王壇古墳遺物出土状態

b）阿武隈川流域を中心とする紐帯

天王壇古墳から出土した刀子形は、大型扁平で鞘部に列点が施されたもので、「鞘部列点類型」と呼称する。同様の形態を呈する刀子形は、白河市建鉾山祭祀遺跡・栃木県宇都宮市雷電山（らいでんやま）遺跡でも出土している。

また、天王壇古墳の斧形と平面形態が近似するものは、建鉾山祭祀遺跡、宮城県色麻町念南寺（ねやじ）１号墳・大崎市名生館（みょうだて）遺跡、山形県尾花沢市八幡山祭祀遺跡に類例が見られる。

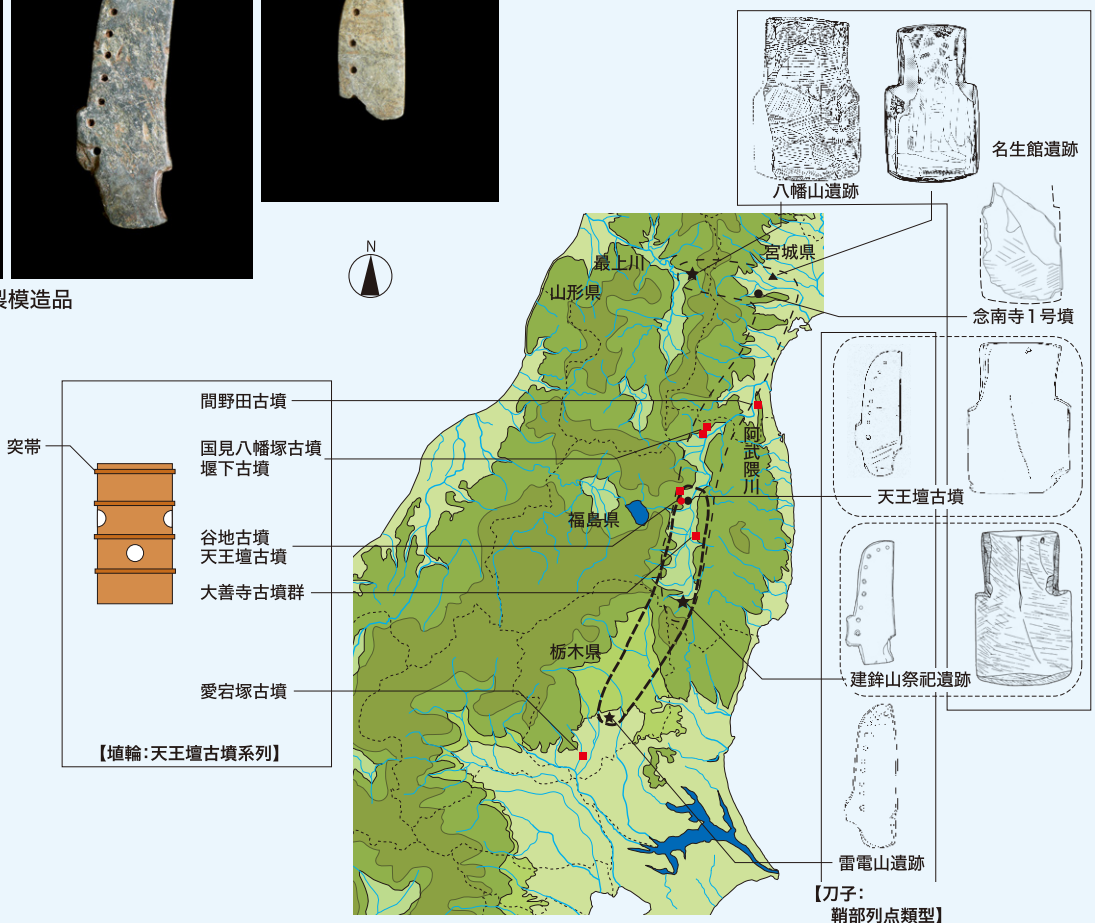
こうした遺物の共通性から、５世紀中葉から後半の時期に、天王壇古墳や念南寺１号墳に葬られた首長や、建鉾山祭祀遺跡・雷電山遺跡や八幡山祭祀遺跡で祭祀を行った首長どうしの結び付きが考えられる。このように、地域における上位階層の首長との繋がりが顕著に認められるようになる。

５世紀中葉から後半の関連事象としては、藤澤敦氏が「天王壇古墳系列」とする共通した円筒埴輪の存在が挙げられる（藤澤2002）。この埴輪は、口縁部直下に突帯（とったい）を有する特徴的な円筒埴輪で、国見八幡塚古墳（塚野目１号墳）や天王壇古墳など、阿武隈川流域から栃木県南部の古墳で確認される。このように副葬品や埴輪の共通性から、葬送祭祀のネットワークで結ばれた首長層の姿が浮かび上がる。

天王檀古墳出土石製模造品

伝雷電山遺跡出土石製模造品

建鉾山祭祀遺跡出土石製模造品

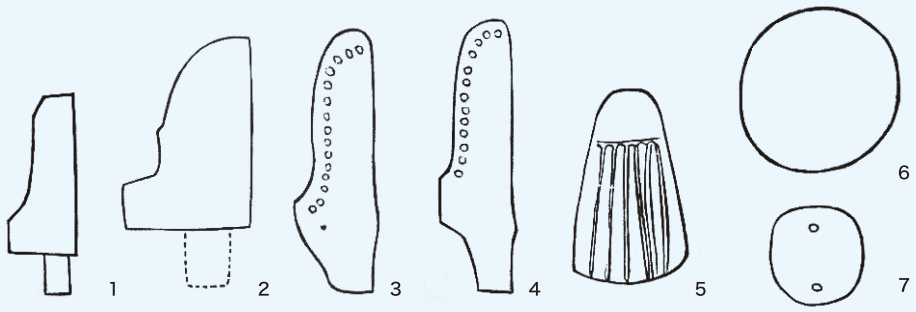


特徴的な刀子形と斧形石製模造品の分布

c）先学による記録

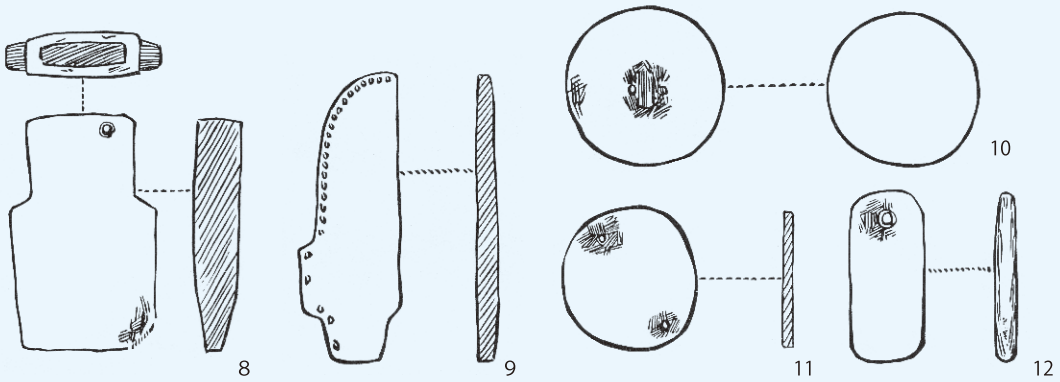
天王壇古墳から出土したと考えられる石製模造品が最初に紹介されたのは、1887年、犬塚又兵氏によってである。『東京人類學會雑誌』に掲載された文章の記載によると、「岩代元宮」から出土し「近邊道路開鑿ノ時得タル」とあるが、詳細な出土地は不明である（犬塚1887）。

同じ『東京人類學會雑誌』には、新國西賞氏が「岩代國安積郡ノ古墳」として遺物を紹介している。1890年に安達郡「南之内」で「近傍ニハはにわ土器ノ破片散在スル」古墳数基を実見、その内の１基を試掘し「石棺存在シ」遺物を看出したとある（新國1892）。新國西賞氏は郡山市小原田の円寿寺の13代住職で、貴重な遺物は今も同寺に残されている。



犬塚氏紹介資料

櫛形石製模造品



新國氏紹介資料

○岩代国安積郡ノ古墳　　新　国　西　賞

明治二十三年ノ夏期　斯学ノ材料採集ノ爲メ岩代国安達郡各村ヲ巡遊セシ際　南之内ト云ヘル地ニテ古墳数個ヲ寛見セリ古墳ノ面積八歩バカリ　皆桑田ノ中ニ孤立ス　近傍ニハはにわ土器ノ破片散在スルヲ見ル余ハ此等ノ古墳中一個ヲ試掘セシニ石棺存在シ　第一図ヨリ第五図ニ至ル　遺物ヲ看出セリ　第一図ハ甞テ羽柴氏ガ本誌第七十五号三〇八ページ第四図ニ示サレタルモノト類似シ柄ヲ挿ムベキ孔ト目釘孔ト見ユルアリ　滑石質ナリ第二図ハ形状恰モアイヌ人用ノマキリニ似タルモノ　第三図ハ図形ニシテ裏面ニツマミ紐ヲ附スベキ孔アリト第四図モ図形ニシテ表裏ニ貫通セル二個ノ小孔アリトス　第五図ハ長方形ニシテ第四図ノ如キ一個ノ孔アリトス　其田石棺中ニハ刀剣アリシガ皆折レテ四五寸トナリ居タリ故ニ完備セル形ヲ知ル能ハズ因テココニ略ス

以上ノ事實ニヨリ考フレバ　第一図ノ品ハ葬儀品ナルコト　明カナリ余ハ羽柴氏ノ説ニ賛成ス然シトモ尚会員諸君ノ高説アラバ速ニ示サレンコトヲ乞フ

編者曰ク　第二図ハ従来石小刀ト稱シ　畿内地方ノ古墳ヨリ多ク発見セラルルモノナリ

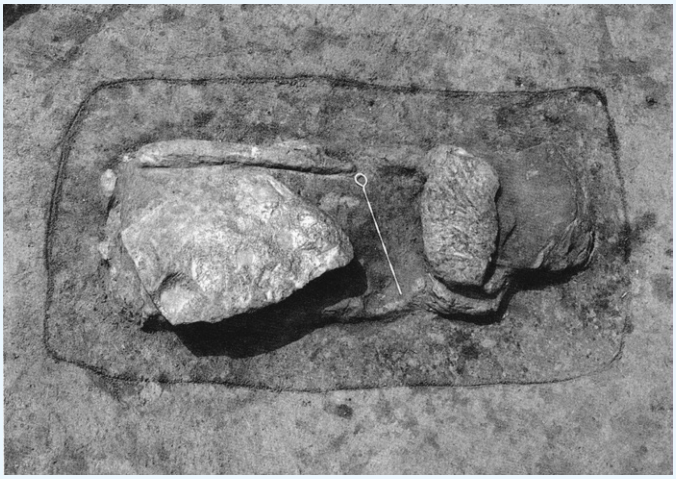
（常用漢字に改めた。タイトルはそのまま）

d）小浜（こばま）2号墳

小浜古墳群は双葉郡富岡町に位置する。富岡川河口付近にある円墳６基からなる古墳群である。海岸侵食による古墳消滅の危機にあり、1984年に発掘調査が行われた。

２号墳は、墳丘の規模が東西11.7×南北11.9m、高さ0.9mを測り、幅約0.4mの周溝が巡ることが判明した。埋葬施設は箱式石棺が検出され、箱式石棺からは、鉄鏃などとともに石製模造品が多数出土している。

被葬者の頭位を石棺の幅広の東側と考え、身体を伸ばして埋葬する伸展葬（しんてんそう）と想定した場合、遺物は被葬者の胸部付近に多く位置する。また臼玉は被葬者の左側に偏って集中する。



小浜２号墳墳丘および箱式石棺出土状態

小浜２号墳箱式石棺遺物出土状態

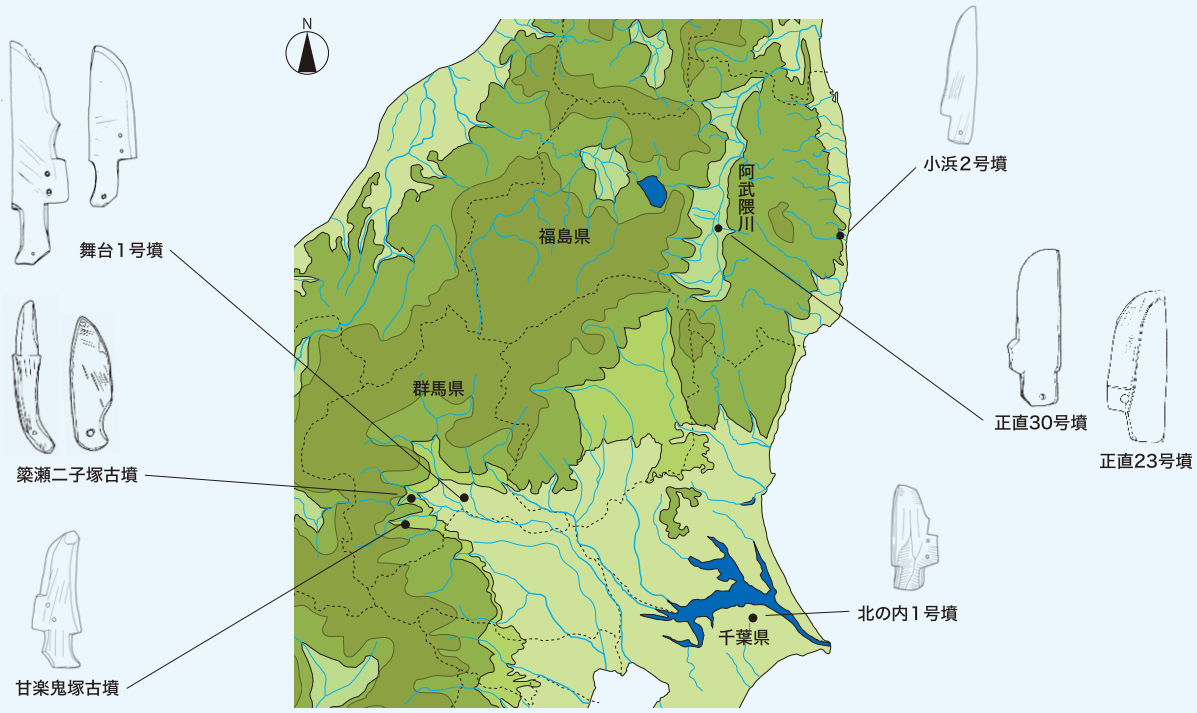
e）変容する刀子形

石製模造品は刀子形４点・剣形１点、多数の有孔円板に加え、臼玉が176点出土した。刀子形はいずれも形態的特徴を同じくする。平面形は、背側で鞘部と把部の区別が無く一直線である。刃側では方形突出部の作り出しは弱いものの、僅かにその表現が残る。表面では、鞘部と把部の区別がなく平坦である。そして、いずれも円孔は把部に穿たれている。

刀子形では、把部先端の刃側の隅について、角が平坦にされたり、全体に刃側が短くなるように削られている。定型的な刀子形の把部先端は抉りが入れられたり、あるいは刃側が短くなるように削られているため、本資料は鞘部を持つ刀子の模倣と考えられる。

小浜２号墳出土石製模造品

５世紀後半から６世紀初頭の刀子形を概観すると、同じ東北地方南部の正直23号墳は穿孔が把部に穿たれ、30号墳は扁平で背側が直線となるなど、異なる形態変化を示す。群馬県の甘楽鬼塚（かんらおにづか）古墳や舞台１号墳では把部の作りが大きくなるとともに、舞台１号墳例は把部に穿孔がなされるなど、異なる変化を示す。



特徴的な刀子形の分布

Ⅲ. 石製模造品製作跡

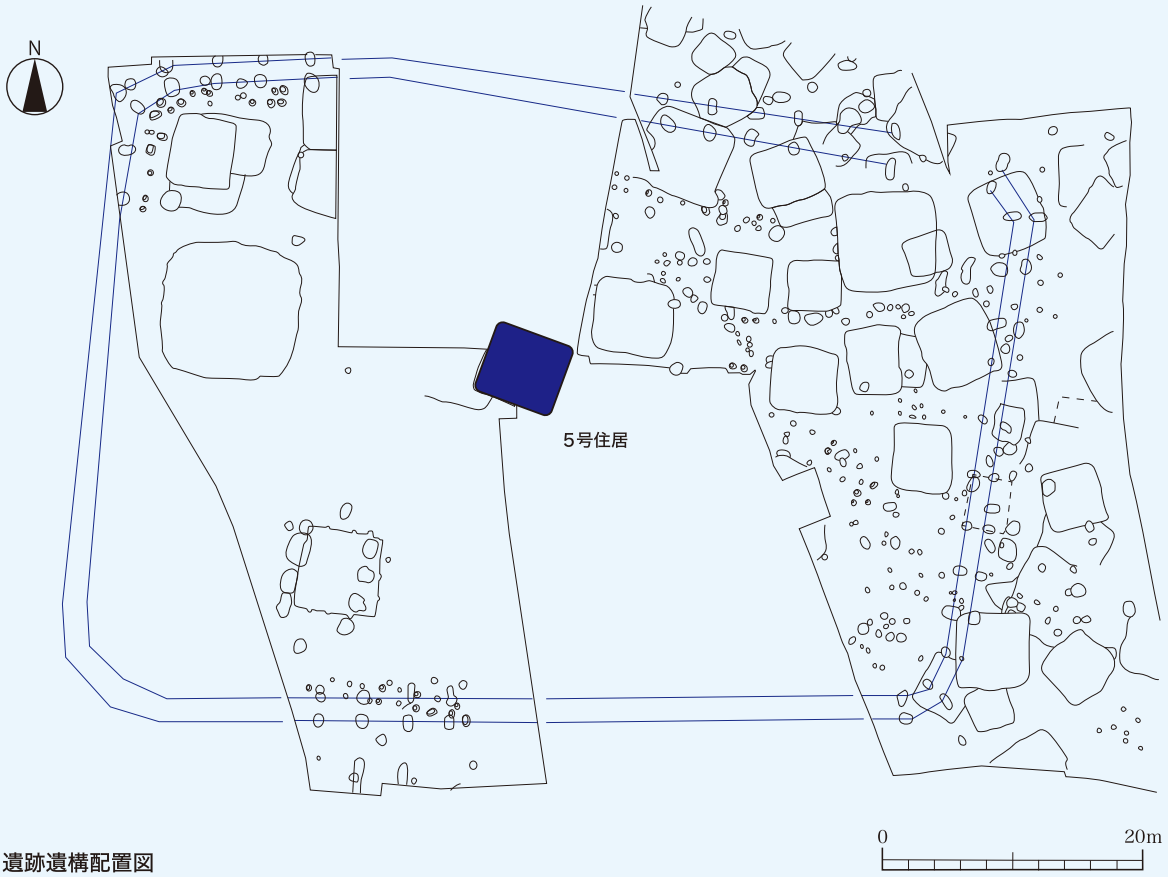
a）菅俣（すがまた）Ｂ遺跡石製模造品工房の概要

菅俣Ｂ遺跡はいわき市に位置する。古墳時代前期・４世紀の二重柵列（さくれつ）、竪穴建物が確認され、同時期の首長居館（きょかん）と考えられる。

遺跡からは、５世紀前半の石製模造品工房も確認されている。遺跡の主体となる前期の遺構とは、一見すると関連は希薄とも思われる。しかし、石製模造品工房の５号住居は、遺構が少ない柵列内側の中でもそのほぼ中央部に位置する。検出した部分は竪穴全体の1/4ほどだが、遺構配置の面からは全く関係がないとも言い切れない。

工房の位置付けは、二通りの解釈が可能となる。一つは、居館が廃絶した後に工房が現れるという前代からの「断絶」を重視する方向である。もう一方は、首長居館としての機能は低下しながらも、居館居住者が担っていたであろう生産という機能を引き続き行う、「継続」を重視する考えである。

ここで強調しておくべきは「首長居館」と「刀子形石製模造品」という二つの要素である。その居住者は古墳に埋葬されるべき人物であり、刀子形は首長墓に副葬される石製模造品の主体となるものである。５世紀に首長居館が廃絶しても、そこに居住していた者との密接な関連を読み取ることができる事例である。



菅俣Ｂ遺跡遺構配置図
二重柵列と竪穴建物の多くは古墳時代前期のもの。

b）刀子形の未製品

菅俣Ｂ遺跡から出土した石製模造品は、製作段階の未製品で刀子形１点、器種不明１点、台形状を呈するもの１点となり、他は原石（げんせき）や剥片（はくへん）である。

刀子形未成品には、いくつもの工具痕跡が見られる。刃側や背側には光沢のある工具痕がみられる一方、穿孔はなされず、側面には荒い擦痕（さっこん）が残る。また、剥片に見られるような打突痕（だとつこん）や、ノミあるいはタガネの工具の痕跡が全く見られないことは、大まかな形態の作り出しが終了し、さらにそれらの痕跡が取り除かれた段階であることを意味している。

【写真借用・遺物所蔵先一覧】

Ⅰ.

十三塚遺跡ＳＫ-１土坑出土遺物：名取市・名取市歴史民俗資料館
板橋２遺跡ＳＫ872土坑出土遺物：山形県・山形県埋蔵文化財センター
下槇遺跡４・５号住居出土遺物：山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
入の沢遺跡13号竪穴建物出土遺物：東北歴史博物館

Ⅱ.

塚原古墳出土遺物：棚倉町（金田拓也氏写真提供）
塚野目11号墳出土石製模造品：国見町・国見町文化財センター
真野49号墳礫槨全景・真野49号墳出土石製模造品・真野49号墳石製模造品出土状態
　：慶應義塾大学・南相馬市教育委員会
八幡山遺跡出土石製模造品：山形大学附属博物館
念南寺１号墳・藤田新田遺跡出土石製模造品：東北歴史博物館
鴻ノ巣遺跡９次19号住居出土石製模造品：仙台市・仙台市教育委員会
桶師屋遺跡出土石製模造品：福島県文化財センター白河館
剣崎天神山古墳出土石製模造品：群馬県立歴史博物館
経塚古墳出土石製模造品：安中市・安中市教育委員会
正直９号墳出土石製模造品：福島県立博物館
天王壇古墳遺物出土状態：本宮市・本宮市歴史民俗資料館
天王壇古墳出土斧形石製模造品：円寿寺
伝雷電山遺跡出土石製模造品・天王壇古墳出土櫛形石製模造品：京都国立博物館
建鉾山祭祀遺跡出土石製模造品：白河市
小浜２号墳墳丘および箱式石棺出土状態・箱式石棺遺物出土状態・石製模造品
　：富岡町教育委員会・とみおかアーカイブ・ミュージアム

Ⅲ.

菅俣Ｂ遺跡５号住居出土石製模造品：いわき市・いわき市教育委員会

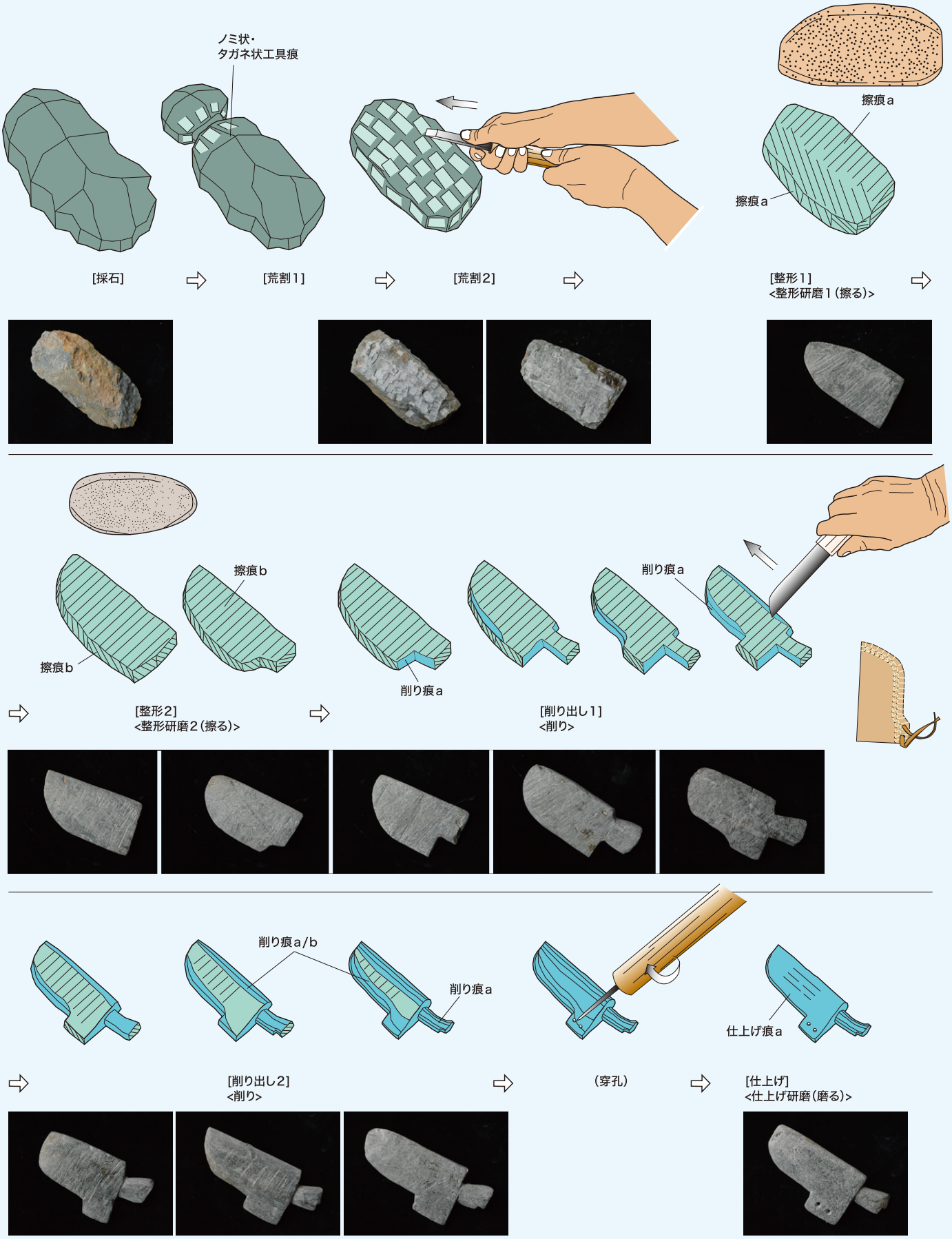
【引用文献】

犬塚又兵　1887「岩代元宮石器」『東京人類学会雑誌』第18号　東京人類学会　287-288頁
新國西賞　1892「岩代國安積郡ノ古墳」『東京人類学会雑誌』第76号　東京人類学会　346-348頁
福 島 県　1964『福島県史』第６巻・資料編１・考古資料
藤澤　敦　2002「東北地方の円筒埴輪－窯焼成埴輪の波及と生産－」『埴輪研究会誌』第６号
　埴輪研究会　17-42頁

【協力者】

安中市・安中市教育委員会　いわき市・いわき市教育委員会・いわき市考古資料館　円寿寺　大玉村　京都国立博物館　国見町・国見町文化財センター　慶應義塾大学文学部　白河市　仙台市・仙台市教育委員会　棚倉町教育委員会　東北歴史博物館　富岡町教育委員会・とみおかアーカイブ・ミュージアム　名取市教育委員会・名取市歴史民俗資料館　福島県文化財センター白河館　福島市　南相馬市教育委員会　本宮市・本宮市歴史民俗資料館　山形県・山形県埋蔵文化財センター　山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館　山形大学附属博物館

荒淑人　安藤広道　江川逸生　押野美雪　金田拓也　黒澤純也　木幡成雄　小堀高広　三瓶秀文
渋谷孝雄　菅原翔太　鈴木功　鈴木啓司　鈴木一寿　鈴木舞香　関根章義　鶴見諒平　戸田伸夫
新國善寛　平澤慎　福岡良太　安田稔



[○○]:段階　　<○○>:手法

製作工程復元図